

道 嬾 嬌

第 七 年 · 七 月 號

中華民國二十七年七月五日出版
第七年七月一日出版
（一月一號）
（一月一號）



原料香水 オリヂナル

香水の香に親しむ
季節です。

オリヂナル香水御愛用
の方には唯今御優待と
して

大中小何れでも一瓶
お買上げ毎に……

光輝茶金石
香水ふりかけ容器

一個宛贈呈致して
居ります。

鏡臺の裝飾などに
大變よろしい美術的
新案容器で御座います

香水入純植物性

オリヂナルポマード
艶よしのびよし香りよし！

頭髮香水

オリヂナルベール
フケ、カユミを去り脱毛を防ぎ
頭腦を清爽にし殺菌力あり



本 舗 安 藤 井 筒 堂 株式會社
東 京

風味必ず御氣

風味必ず御氣に召す

天ふら御料理

季節日本御料理

芝居情緒と食道楽 喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ばし北詰

支店

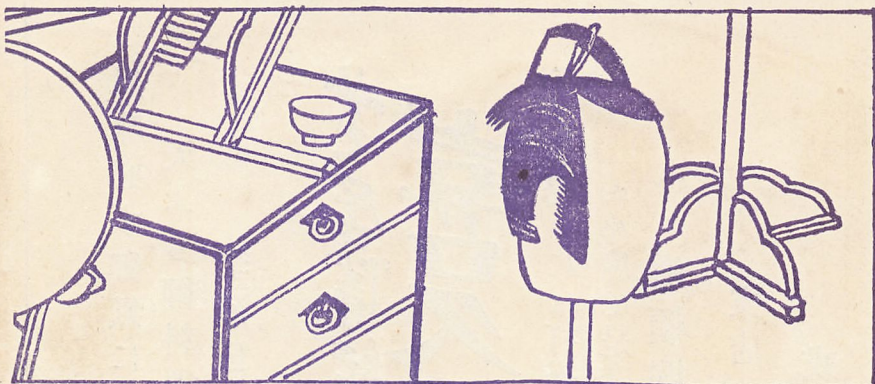
大阪支店 北新地裏町

京都支店 木屋町ドングリ橋

戎橋 喜久屋北店開店

(心齋橋筋二丁目)





道頓堀 昭和七年七月號 第七十輯

繪 口

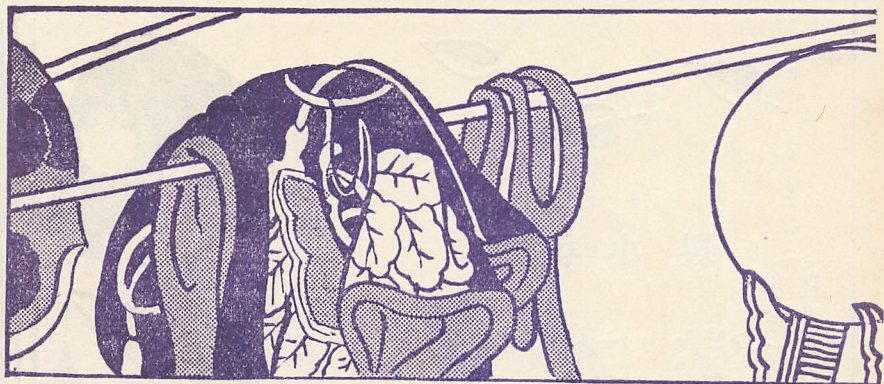
浪花座 七月興行 松竹家庭劇 御一人様で満員 山田の海岸附近の森、村田の道場の高山、元安の野本、天國春
 日ま令高、山田の平助、春野の東島、清童子、小織、眞山、眞田、石川、林、元平、山、口、山、外、山、吉、天
 元安の眞山、平助、春野の東島、清童子、小織、眞山、眞田、石川、林、元平、山、口、山、外、山、吉、天
 作十石の浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 士野の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 進野の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 吉田の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 玉次郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 與次郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 京七文の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 段八の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 兵衛の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 衛右衛門の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 静枝の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 一衛の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 黄門の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 庄屋の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 娘の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 胡蝶の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 蝶賣の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 雀の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 一妻の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 三の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 五郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 代官の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 祐太郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 助三郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 五郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 高成の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 豆田の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 鬼王の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 黄門の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 静枝の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 五郎の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 九女房の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 櫻子の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 薬賣りの石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 娘の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 櫻子の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天
 子家の石河、浅田、角座、澤月、興河、新球、劇、時雨、吹金、吾靈、雨、後、小、元、利、安、平、山、口、山、外、山、吉、天

特輯 芝居から小説に
 百物語の夜
 淡熊一代
 高谷伸 (二)
 薫甫庵 (三四)

大磯心中の劇化
 山上貞一 (八)

銷夏讀物 (一)

ラルジャン・オリンピック
 一ヶ月拾萬圓消費法
 小織桂一郎・石河薫
 元安 豊・東 愛子
 (一〇)



勸 彌 追 悼

在りし日の勸彌を偲ぶ……………倉田啓明（二三）
 大阪で死んだ守田勸彌……………山上貞一（二九）
 「父」に語る……………坂東好太郎（二七）

◆ 銷 夏 讀 物 （二）

ぞつとした話

- ◇ 廊下に消えた足音……………辻野良一（二三）
- ◇ 畫面の暗影……………和歌浦糸子（二五）
- ◇ ヒヒヒこ虚空の笑聲……………金剛麗子（二八）
- ◇ 長襦袢一枚……………藤本正雄（三一）
- ◇ ぞつとする行末……………芝田新（三三）

□ 七月の各座……………（二三）

□ 編輯後記……………住田冬和（四二）

□ 挿繪カッター……………田中滿彦

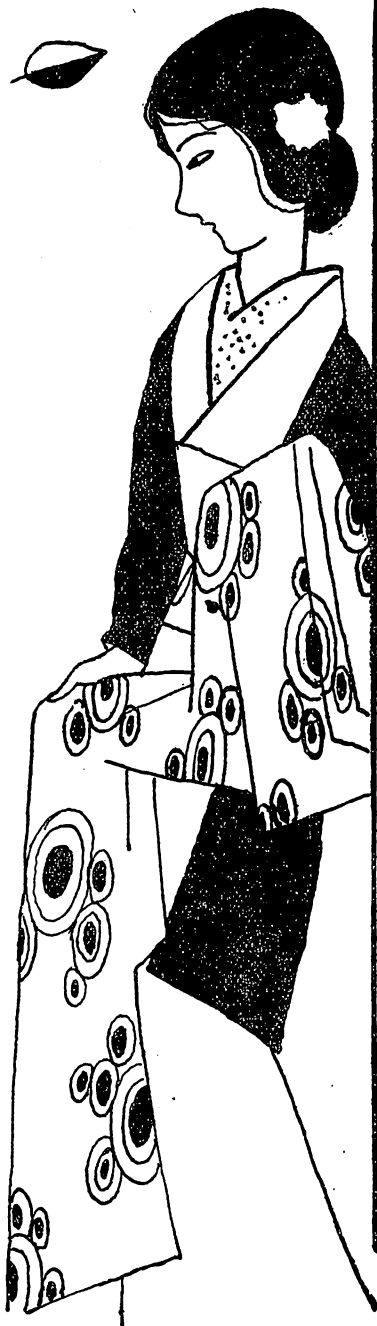


裂 小・具道小
貸 衣 裳

（其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい
 御來客の御相談に應じ便利よく取計ます）

素人演藝會
 宴會の催物
 春秋温習會
 婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部



本 店
 東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
 電話 戎 五 六 三 四 番
 東京市淺草區並木町十五
 園電話 淺草 五 五 九 九 番



新聞

廣告は電通

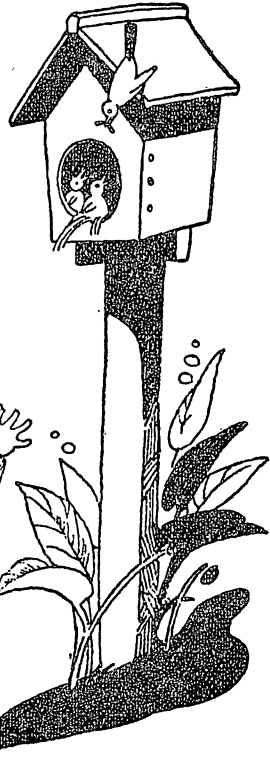
本社 東京 日本電報通信社

支主
局ナ
ル

南北釜下金百吉
平山關澤
京京長京的
青津城崎部館
巴青奉福御札
星島天岡戸機
倫漢大隈岡齊
敦口連平山森
乘上哈鹿限仙
港海寶島島臺
羅廣臺大松長
府東北分山野

大阪市北區中之島三丁目
新聞通信及
廣告代理業
大阪電報通信社

本局
九二一六五
九九五五五
六一九九三
六〇三八四
三二六六六
九〇〇〇四
二〇二五五
〇〇六六〇
〇〇三〇〇



小鳥にも亦

親心あり

さて

考へさせらるゝ

ことは……………!!!

大同生命

本社 大阪土佐堀
案内書贈呈

御一考を
煩したい話
あなた若しも斯く
申されるなら

「保険に這入る餘裕がない」と

之は甚だ失禮な申しようですが、「眞に偽りのない御言葉でしょうか」之は結局、生命保険をつける事は、可愛い御子様達（又、奥様）の爲めに、絶対必要であると御承知でありながら、而も之れに加入なさらない一つの自己辯護ではないでしょうか。

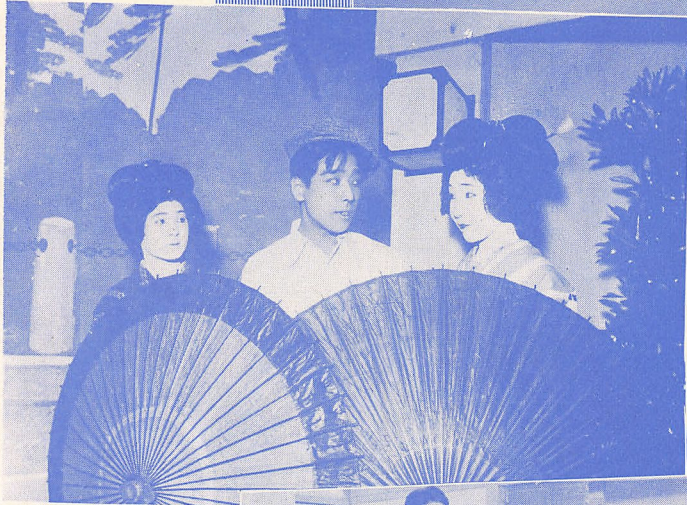
假りに實際餘裕がなく、貯金すらも出来ぬならば、萬一の場合、あなたの可愛いお子様は——奥様は、どう御分別がつかますか餘裕がないと云ふは、畢竟餘裕を作らないことです。どんな餘裕のない人でもキツトお子様はお育ちなります。これこそ親の愛情が作り出す餘裕です。

あなたが御子様や奥様の行末を思ひ、日々ホンの僅かな無駄を御省きになれば保険の掛金は譯のない事です。

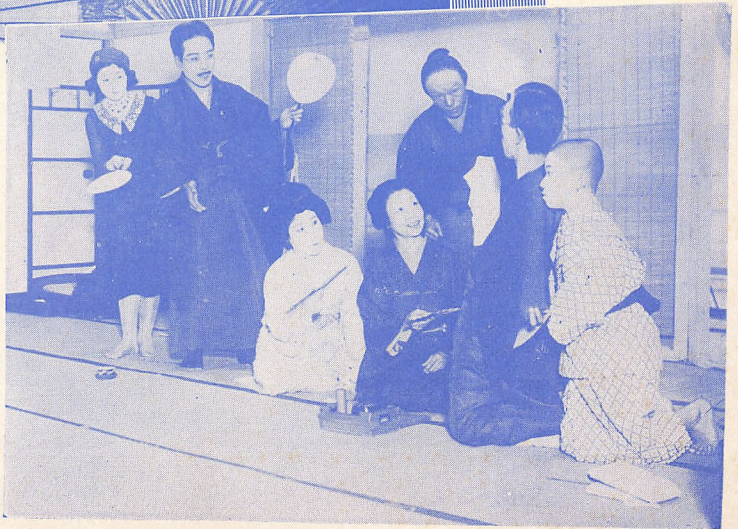
「大同生命」の「特別養老保険」は契約後滿二年経てば保険料と經過年數に比例して毎年利益配當が次回掛金から差引かれますので年々樂になる一方で、而かも滿期には割増金も付き貯金としても、或は又、投資保険としても頗る有利で勿論滿期の場合だつて決して御損にはなりません。

竹松
家
庭
劇

『御一人様で満員』



小森忠一 山田隆也
 竹原高子 村田満智子
 野木敬一 元安 豊
 合姫 富貴子 春日恵美子
 * 江口 勇作 天 浅妻 明子
 瀧 外



海岸附近の旅館の場

『ヨットの舵』

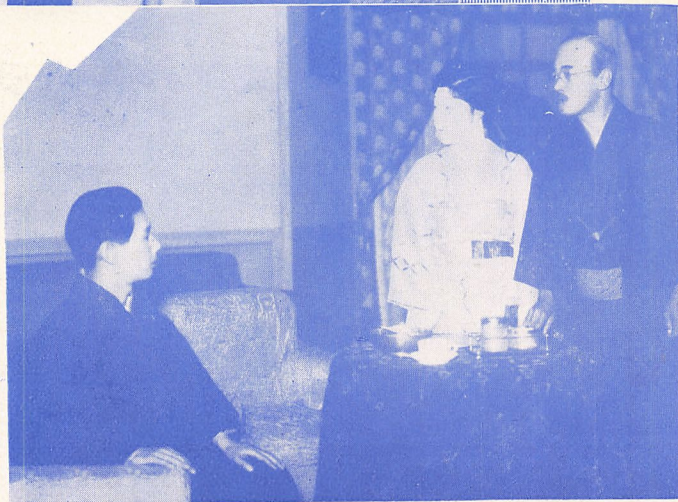
七月の浪花座

松竹家庭劇

大學生圖書三郎・高田亘
女學生真山保子・東受子



『大磯
心中 愛よ、天國まで』



銀行重役 真山貞七・小織桂一郎
圖書 三郎・高田亘
三郎の姉 今井道子・石河薰
保子の兄 真山吉太郎・山田隆也

『大磯
心中 愛よ、天國まで』



眞山 貞七・小繼桂一郎
 今井 道子・石河 薫
 眞山 平助・元安 豊
 妻島子・春野 香羽
 弟 幸一・文 童
 眞山吉太郎・山田 隆也



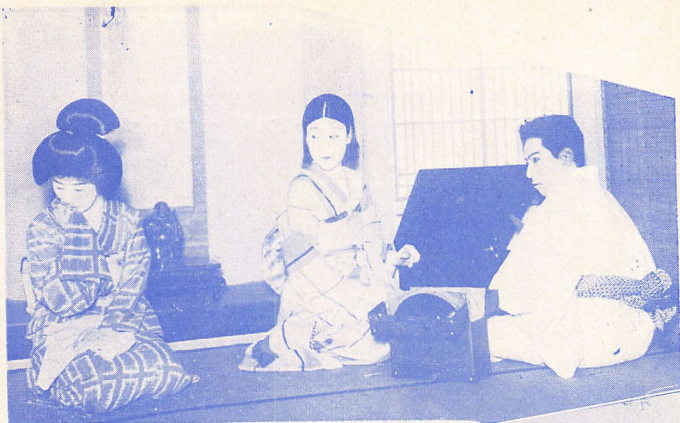
今井 道子
 石河 薫
 圖書三郎
 高田 亘
 眞山 保子
 東 愛子

七月の
浪花座



松竹家庭劇

『發聲幽靈 雨後の月』

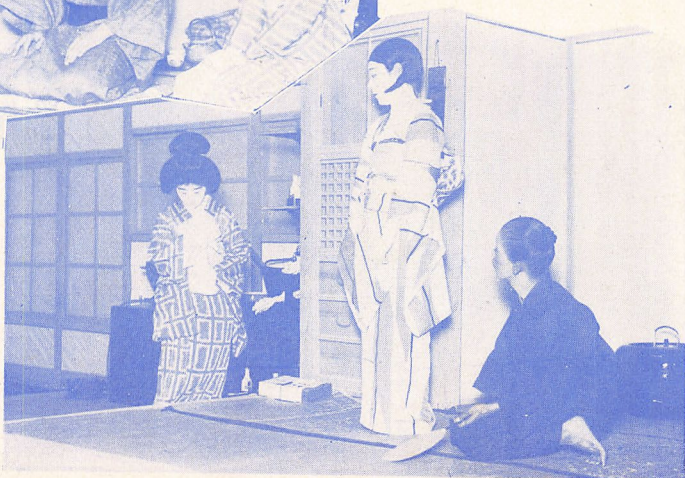
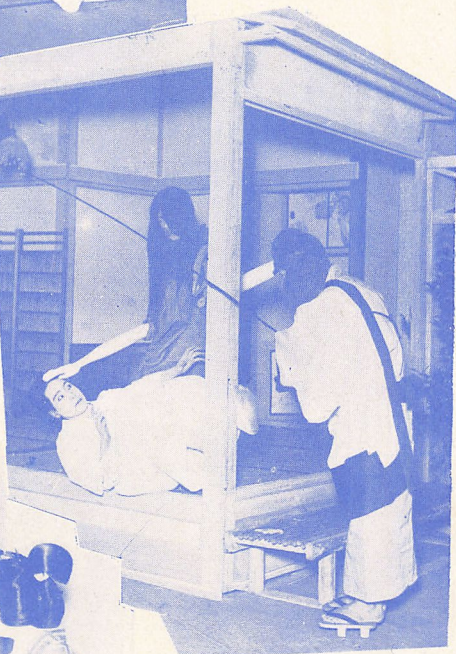


役々は？

妻わか子・東愛
父慎作・山田隆也
雇婆お兼・十吾

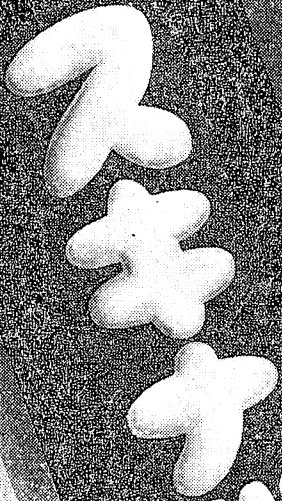


田宮伊三郎・澁谷天外
妹球江・石河薫
妻わか子・東愛子



わか子・東愛子
球江・石河薫
お兼・十吾

お顔の
あぶらを取るには
是非
日



あぶらとりかみ
脂取紙



發賣元 大阪 朝日堂株式会社
製造元 大阪 中田スキナ屋

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

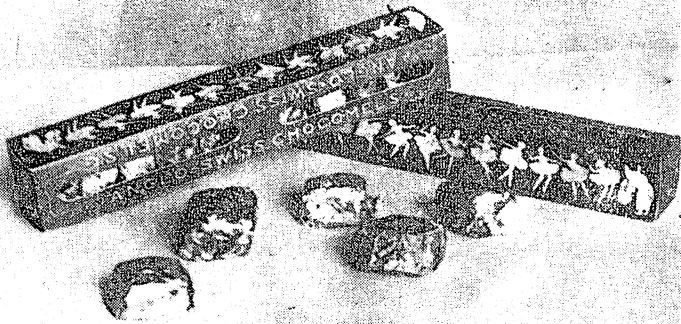
コーヒキヤラメル

チヨコレート
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元
株式會社
横山商店

電話東(94) 一六六一番
二〇四九番
四六四九番



松竹家庭劇
七月の浪花座

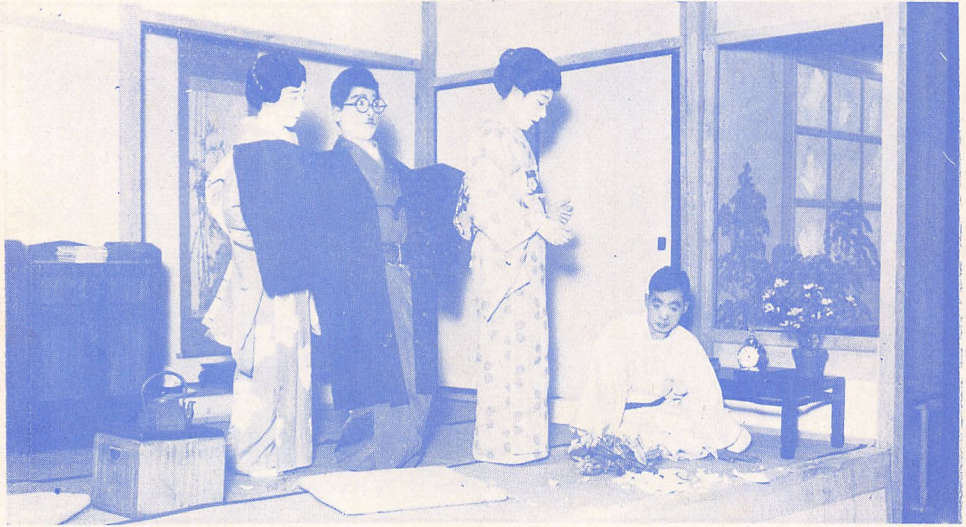
『蝸牛』

カフェー九十八番のホール

福田哲三
丸山
友人松岡
女給芳子
十吾
元安豊
天外
東愛子

家の三哲田福

福田哲三・三田友松・天
妻浅子・石河愛子
吾外
芳子

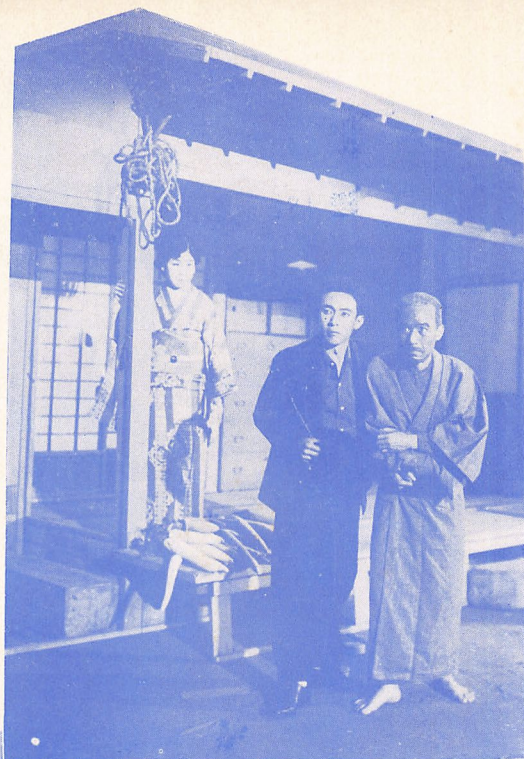


新聲劇

角座七月興行

『土と金』

小林利平
三木求一
長女おきん
伊川八郎
山口俊雄
富士野葛枝

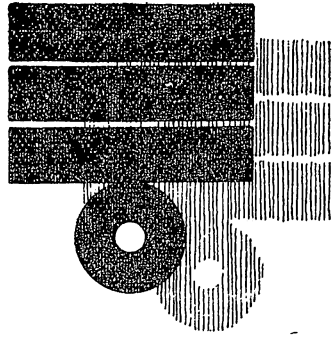


長男義男
長女おきん
小林利平
吉田正雄
富士野葛枝
伊川八郎

『時雨唄鈴鹿越』

今里半平
藤崎亮之進
妹おつき
辻野良一
山口俊雄
福岡君子





三ツガツン酢

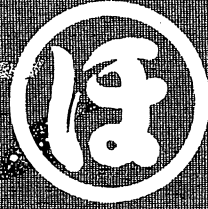
園内着御用達

中
莖
酢



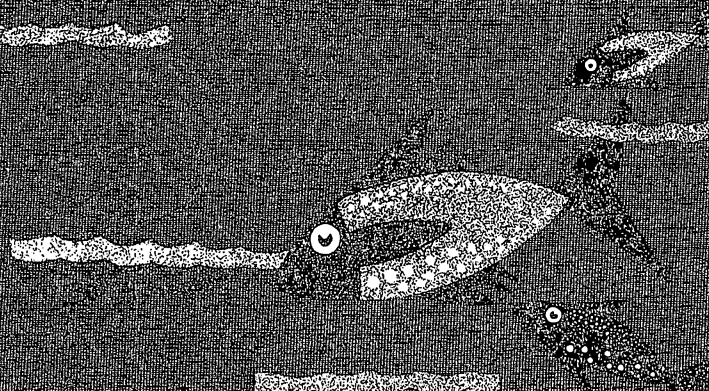


ホマヤ



ほるま

油醬口淡等高



町龍州播 店本
町屋治銀市戸神 城頓道西市阪大 店支
社會式株油醬田坪

『熊 淡 俠 豪』

造 正 田 中 ・ 熊 淡
 一 良 野 辻 ・ 郎 太 初 の 花 浪
 雄 正 本 藤 ・ 助 直 木 淺

劇 聲 新



菊 小 政 の 女 房 お つ る
 三 ・ 芝 田 新
 ・ 富 士 野 葛 枝

七 月 の 角 座

子 淡 子
 分 分 分
 小 天 天
 政 德 德
 ・ ・ ・
 原 中 原
 健 田 健
 作 正 作
 造 造 造
 浪 花 浪
 の の の
 初 太 初
 郎 郎 郎
 ・ ・ ・
 辻 野 野
 良 良 良
 一 一 一

新聲劇

『豪俠淡熊』



女房お花・和歌浦糸子
淡熊・中田正造
娘お常・小松孝子

茅野金三・小波若朗
浪花の初太郎・辻野良一

七月の角座





プロシイルマ

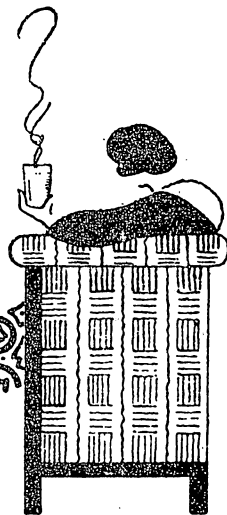
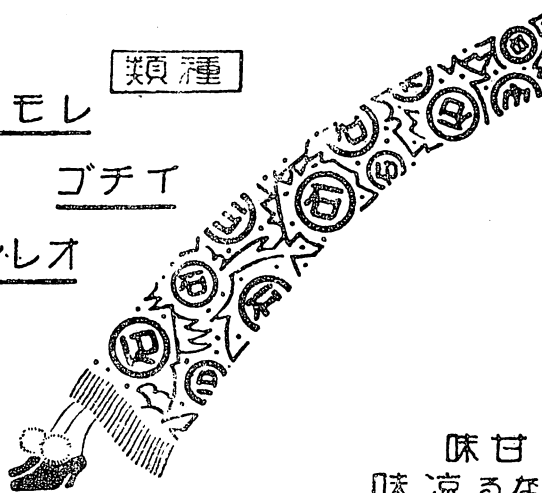
るゐと杯十が杆一
素の料飲涼清

類種

ンモレ

ゴチイ

チンレオ



味甘るせ越卓
味涼るな快爽

目ラ二町路淡区東市阪大
社会后合業製石丸
ハ一六四 七六三一 局本産

ルービヒザア

シロトシンボリ 料飲涼清

爽快！限りなし
飲み心地
酔ひ心地
まさに恍惚境！！



大日本麦酒株式会社

国内省御用達

文樂座・人形浄瑠璃・お祭月興行

『近頃河原の達引』

與次郎の母・吉田小兵吉
 井筒屋傳兵衛・吉田扇太郎
 娘・おしゆん・吉田文五郎
 猿廻し與次郎・吉田 榮三



『一の谷嫩軍記』

源義經・玉次郎
 熊谷次郎・榮三
 妻相模・文五郎
 藤の局・政 龜

『傾城阿波の鳴門』

お弓・紋十郎
 おつる・榮三郎

『月山おろし』



中村扇雀
市川小太夫
合同劇

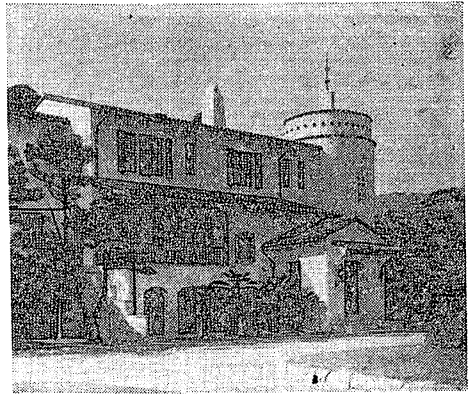
お 貞 ・ 中村成太郎
お う た ・ 松本錦吾
新 八 ・ 市川段猿

酒田の重右衛門 ・ 市川九團次



重右衛門 ・ 市川九團次
新 八 ・ 市川段猿
お う た ・ 松本錦吾

新京極 京都座



現代の要求と
嗜好に適った
皆様の御住宅の
設計と施工!!
創設以來。
豊富な経験と
強固な基礎に立つ
住宅部を御利用下さい!!

株式會社

大林組住宅部

- 住宅建築と
- 健康住宅地經營への進出!

大阪天神橋

大林組住宅部 (電東 860-865)



阪神線

濱甲子園

海邊住宅地の

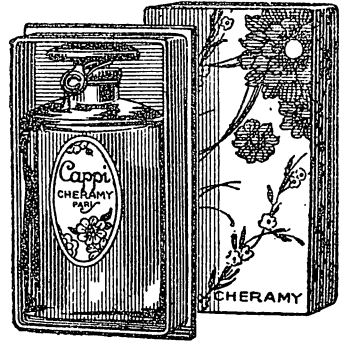
特價提供

サンマー・ハウス

展覽會

是非御縦覧を!!

ンロコデオ・ンヨシローヤへ・水香
 (色各) 粉白粉・水香トツレイト
 (色各) 紅頬・(色各) トクバンコ
 鹼石粧化・鹼石リそ艶・(色各) 紅口
 油香・一ダウパークルタ・洗髮
 ムーリック・油練・ンチンラリア水
 切一他其・品粧化・箱合取用物造



・水香一ピツカ・

佛國パリー・セラミー會社製
 世界的優秀化粧料カッピ化粧品

カッピ化粧料

カッピ化粧料
 ホランダ化粧料
 オフランド化粧料
 ジョリスワ化粧料

輸入元

大阪 大浦彌商店



中村扇雀 合同劇
市川小太夫

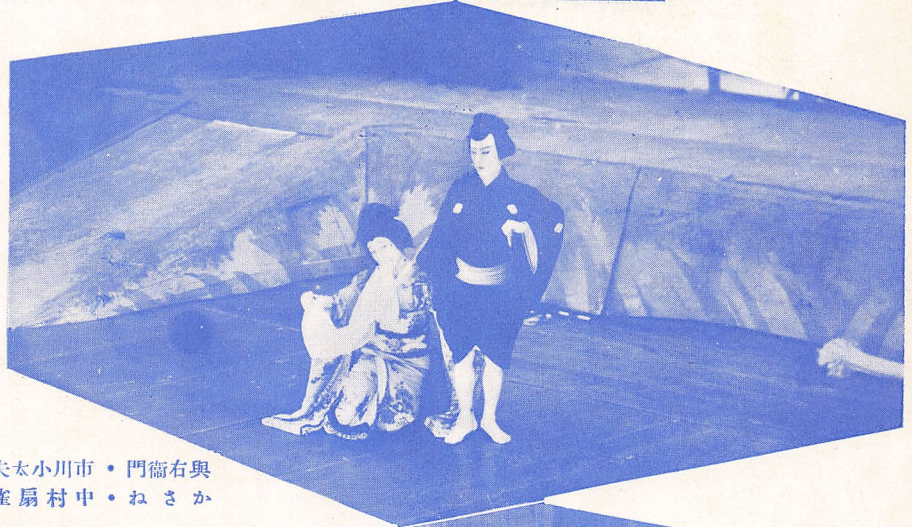
七月の京都座

“輝虎と樵夫”

樵夫長三・小太夫
長尾輝虎・扇雀



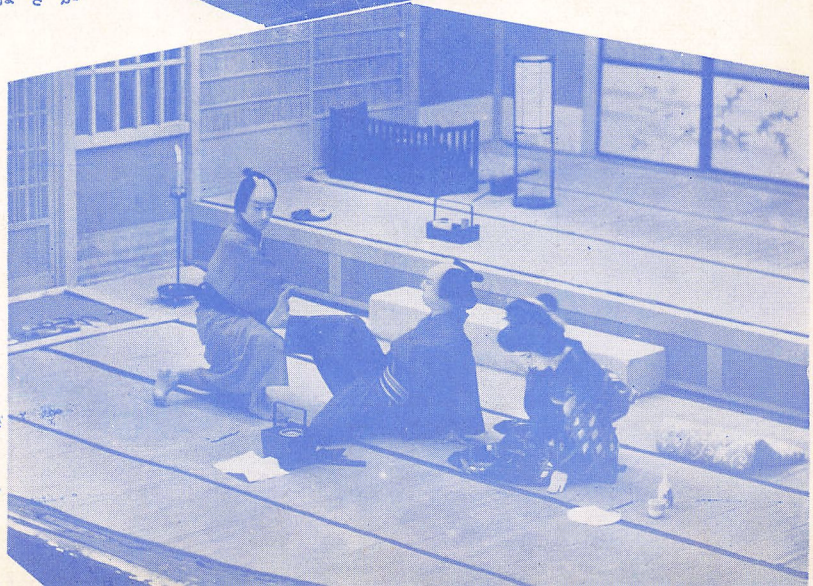
“色彩間苳豆”



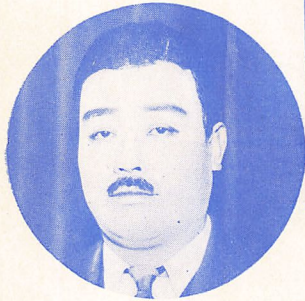
夫太小川市・門衛右與
雀扇村中・ねさか

“鐘ともろ恨鮫鞘”

丹波屋おつま
番具屋彌兵衛
古手屋八郎兵衛
中村成太郎
市川小太夫
中村扇雀



會我廼家
一 二 三



會我廼家
十 次 郎



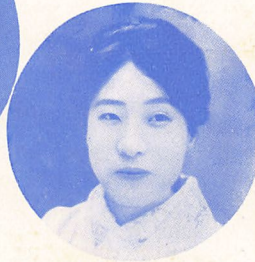
會我廼家
五 九 郎

桂
靜 枝



若 月 孔 雀

武 智 櫻 子



會我廼家 五九郎一 座

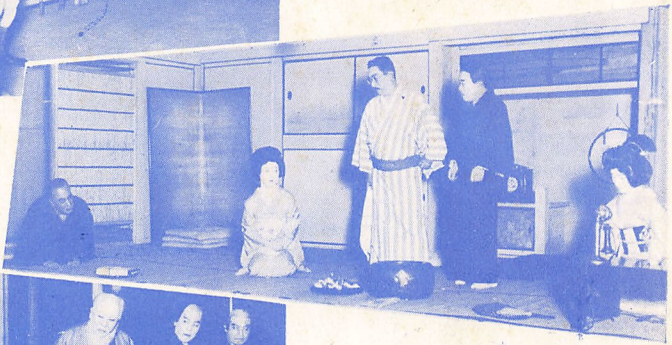
『無名作家』

大工園松 一 二 三
早田の妻 孔 雀
文士早田 五 九 郎
五郎兵衛 トウ屋
國松の女房 五 九 郎
娘みとく 櫻 子



『人 友』

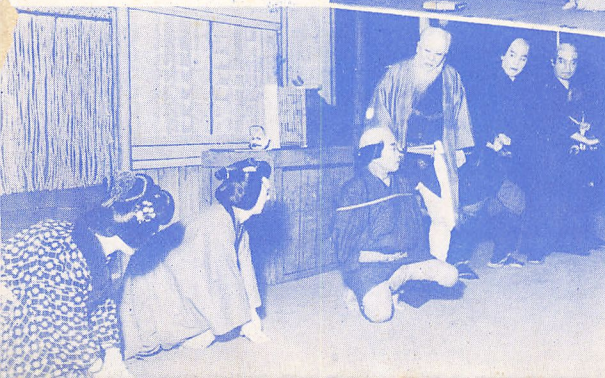
西村悟郎 孔 雀
高田 五 九 郎
お 十 次 郎
お 櫻 蝶
番 鬼 頭 王



『水戸黄門と
富山の薬賣り』

代官岩見 一 二 三
佐々木助三郎 祐 太 郎
水門黄門 鬼 王
薬 賣 り 五 九 郎
許婚金之助 胡 蝶
庄屋の娘 櫻 子

戸 松 竹 劇 場



茶

西區又只字可呼

坐半

南區又只字可呼

二酸化チタニウム配合

クラブ 白粉



緑の街をゆく
麗人の魅力

清新初夏の
街をゆく
佳人の群に
ほのかな香り
クラブ白粉の
粧ひや麗はし

高雅な白色
モダンな肌色
優雅な桃色
清楚な水色

純白固煉



新發賣

御園チタム白粉

驚異的

新化粧美!

正價 金五十錢

■ 艶麗な濃化粧に……………

目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切ったお化粧上り。

■ 清楚な淡化粧に……………

うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■ お襟の魅力に……………

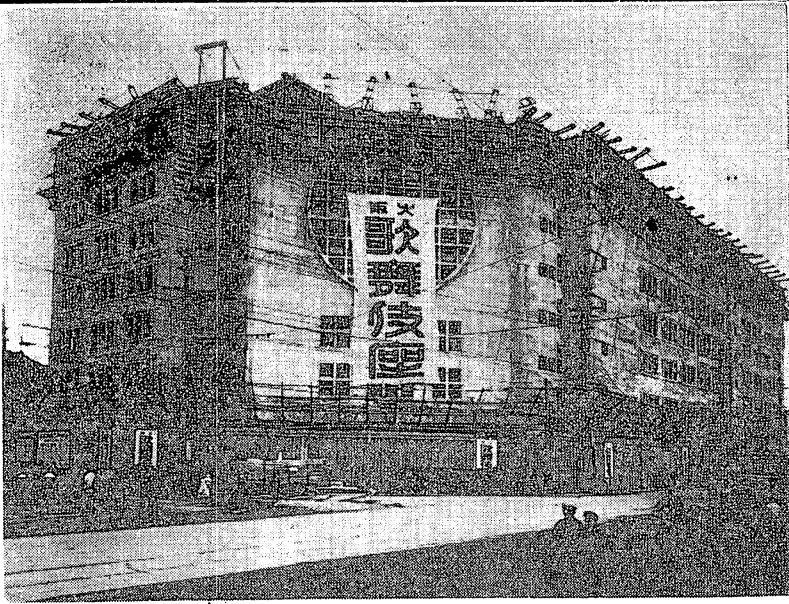
くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

□ 断然優良な新原料が持つ此白さこそ

新日本女性美です!

御ヒイキ・サークル募集

竣工愈々迫る 大阪歌舞伎座 演劇の錦城 大阪歌舞伎座



が斯界に冠たるべく、外觀の極善美と内容の超充實を期し竣築の業に就きましてより既に二歳餘、従事員諸君の孜孜として儘まざる努力は、今やその大半の工程を進めるに到りました。特筆すべき新設備の數々を抱含してゐることは茲に敢て贅言を要しないところでありますが、更によりよき設備をより爽快な雰囲気——開場の上は、皆様の娛樂なり鑑賞なりに一屬の意識を生ぜしめたい——とたいこの初一念を、徹頭徹尾吾が大阪歌舞伎座の上に具現せんとしてゐる次第でございます皆様！竣工の上は、皆様の御支持に依る大阪歌舞伎座をして、竟に世界一の矣持を懐かしめられんことを、竣工を前にして切に希ひ上げます

されば大阪歌舞伎座は『皆様の 大阪歌舞伎座』なるスローガンを眞向ふに奮勵努力する存念で、同時に皆様の御支持を絶對に必要とする次第であります。

何卒『御ヒイキ・サークル』に御加盟の上皆様の御芳名をお載せ下さい。

規定

◇用紙 官製ハガキ（御一名一枚）
御住所氏名御職業明記の事

◇會費 不 要
◇届先

大阪市南區久左衛門町八
松竹興行株式会社大阪支店內

歌舞伎座假事務所

誌雜・究研劇演・刊月

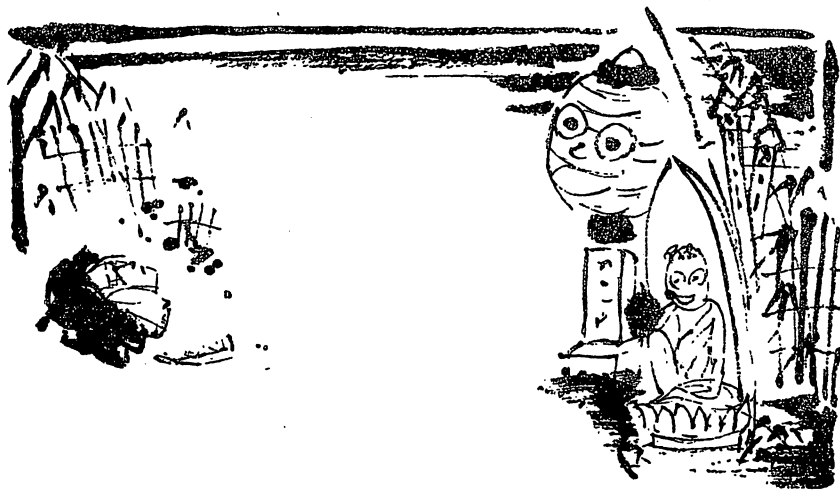
七月號

通類編

第七年

第七十七輯





百物語の夜

— 花菖蒲浮木龜山より —

高谷伸

幽霊の話、妖怪の話、その一つづつ、一筋づつ、減つて行く燈心の薄明りに、夜はだん／＼更けて行く。遠寺の鐘が陰に籠もる丑滿つ時、濱松の淺山家の指南番、石井兵衛の邸で催された百物語の趣向はいよいよ佳境に入つたのである。

二本差したとは名ばかり、泰平の世にありがちの臆病武士石尾郷兵衛、戸倉運八などはそろ／＼浮足立ち、口ばかり強さうな事をいふ山淵官六に至つては狼狽たあけく柴垣で引掻いた額の疵を嗜められ、また、磯田八之丞は石井家の娘おとぎに婚姻を申込んで體よく断られ、それ／＼落着かぬ中に、胸に一物ある赤堀水右衛門のみは、ひとり點頭いて、にや／＼してゐる。

武將久吉公から淺山家へ給はつた伽羅木の観音の保管を命ぜられ、神影奥儀の秘書と共に守護する程の家柄だけに、石井家の庭は泉石の布置、花樹の好みばかりでなく、鬱蒼たる老木も數多く、自然の姿のまゝに廣々と置いて、池を繞る松林のあたりは晝でも淋しいばかりである。そこへ、陰火が現れた。下駄の

化物が現れた、一つ目小僧が現れたといふのだから物凄

い。手柄顔に槍ひつしごいた磯田八之丞は、足もないのに動きだした木燈籠を突きとめると、茶道珍齋がそつと匿した濱焼の鯛を狙つた猫の所爲とわかつてみれば埒もないが、築山の陰、小笹の繁つた草井戸のあたりには、おあつらへの柳の木さへあつて、傳へられる昔話と、もに、薄氣味のわるいじめくした昔が夜露に光つてゐる。

ちよつと見ると弱さうな美男ではあるが、膽の座つた香川半次郎は、他の人々の茶番じみた失敗を嘲る苦々しさと、妖怪に對する好奇心とで、そつと一刀を掲げて、庭下駄をつ、かけた。

築山の向ふへ廻ると、月さへかくれて、通り雨がはらくと頬をうつ。はてなと思つた時、目の前へ轉がされたのは組板程もある下駄の片方だつた。はつとばかり蹴かへすと、ころりと轉がつた下駄の向うに、青い灯がめらくと燃えて、一つ目の化物が坊主頭を、のつと突きだした。

抜討にはつと斬りつけると、一つ目は右手の鉞垣に、すつこんで、左側から、ばつちやう笠に徳利といふお定まりの狸公が顔を出す、おのれつと踏込まうとする時、向ふの樹のかげに、聲があつた。

もし、半次郎さま。

や。名を呼ばれてはつとしたが、油断はならぬ、戻り橋の

鬼女でも、戀しと思ふ殿御故、など、綱の名を知つてゐる。

聲の主は、振り袖に白無垢、かつぎに身を忍ぶ摺といふ誂らえだから變化と見るのも無理はない。身構へして待ちうけると次の聲がする。

え、半次郎さま。何もそのやうに怪しいものぢやござりませぬ。わたしやおまへに迷ふてゐる幽霊でござんすわいなあ。

まさかと思つた半次郎が、女姿といふもの、狐狸の所爲と斬りつけやうとするのを、ぐいと止めた太い腕があつた。

お待ちなされませ。私はお草履取の關助でござります。未來で浮みかねてゐさつしやる幽霊を、今連れて参ります。だうぞ浮ましてやつておくれなされませ。その幽霊はこれここに。

と、突き出された女こそ、天龍川の屋根船に同乗して以來半次郎にも忘れることのできない、おときだつた。

こゝでそらく、癡鳥。

洒落たことをいふ奴であつた。幽霊の合方をそのまゝに、そこで寝よとの粹な捌き、死ぬといふのも當座の縁、幽霊の白無垢は婚禮の白小袖に通ずるのである。

百物語の怖い所を取つて置き、これからが色直し、關助が手燭の火を吹き消すと、あとは眞の闇である。陰火と見へたは芝居の燗酌火、狸小僧の役は茶道の珍齋、そして

どろ／＼を打つてゐたのは鼻の赤い權兵衛といふ役廻り、狂言方の關助の外に、以外な立作者が控へてゐた。それは、おときの母のおらいだつた。

關助のとりなしで、うまく庭の奥の圍ひへ案内されて、しつほりとぬれてゐるおとき半次郎の首尾を、やはり氣になる親心から、そつと竊ひにきた母のおらいに、今一つ、黒い影が從いてゐた。

可愛い、娘を、好きな男に逢はせる趣向の百物語の、うま筋は運んだが、猶氣にかゝる甘い母親の、母とはいへ、色氣の失せぬ年増さかり四十には間のあるおらいの袖をぐつと把んだ男がある。

おらいどの。水右衛門でござる。

おらいはぎよつとした。
かねて心がけのよくない内弟子藤四郎を通じて主ある女へ無體の戀慕、その上、いづぞや天龍川でおときと半次郎を同船させた時の言ひが、り、その場は所持の香箱を投げつけて逃れたが、その水右衛門が執拗くこんな場所へ、それだけでも不安なのに、娘を男に逢はせてゐる弱味もある。そこがまた水右衛門のつけ目である。

ぢり／＼口説きかけてくる。しかし、おらいとして元より應じるべき筋あひではない。といつて、斷られて引込む水右衛門でもない。遁けやうとする程、搦んでくる。

主ある事存じて惚れた花、この間天龍川で無體を申ししたも承知していたした事、一命捨て、申し出した事でござる。

返事のしやうもないので黙つてゐるおらいに、ねばり強く押しつける水右衛門の蜘蛛の糸のやうな攻め手は、だん／＼辛辣になつてくる。

否でござるか。この上は水右衛門、恩を仇なる思案お目にかけやう。見届けたは圍ひの内の不義者、お家の法度を背く大罪人。いま引摺り出すは易けれども、一人の娘を可愛い、と思はゞ水右衛門が心に――

と、退引させぬ手詰めである。おらいは止むを得ずうなづいたが、向うは一筋縄では行かぬ曲者である。

早い／＼。その手で行く水右衛門ぢやない。この場をぬけて手盛りを喰はさうと思つても、そんな古手な浅い事ぢや呑みこまぬ。

挺子でも動かぬした、か者である。おらいも絶對絶命、思ひきつて水右衛門の差添をぬいて自分の指をきつた。

暗の中でも見えるやうに血の流れるのを感じる痛みも忘れて水右衛門の手へ指を渡した。

夫へ預けた女の身體、かう疵つけたら不義はのがれぬ。お前も覺悟でござんせうな。

流石の水右衛門も心を許した。おらいの心中を見とゞけたと軀落の相談をきめて、百兩の金包みをそつと渡した。



勝誇つたやうに歸つて行く水右衛門の姿が、樂山の向ふに消へるまで、ほんやり見送つてゐたおらいは、何心なく渡された金包を見ると、思ひがけない極印があつた。その極印うつた金のために、倅の兵助は盜賊の疑ひまでかけられ、のがれぬ責任のために勘當になつてゐる、その證據ともなる極印である。

おらいは今は口惜しいとも思はなかつた。子の愛しさを思ふ程、義理ある倅も棄てられぬ。その兵助の汚名を雪ぐために、自分が新しい濡衣を着ることなどは何の苦でもなかつた。まして指の痛みなどは問題でもなかつた。

倅の冤罪を雪ぐために一刻も早く夫の兵衛へこの金をと思つたが、闇ひの内の娘も氣になつた。殊に、水右衛門に抑へられてゐるだけ、早く二人を此處から去らせねばならなかつた。

急いであけた圍ひの障子、内には若い男女と思ひの外、兵衛がゆつたり煙草を吹かせてゐるのに二度びつくりだつた。

そちや何しに參つた。

おらいは急に言葉も出なかつた。しかし、黙つてゐる譯にも行かぬので、百物語の怖しさに、飲み馴れぬ酒をつい過ぎしたので酔ひざましに外へ出たが、怖い

話もまた聞きたいと、てれかくしに言つた言葉尻をすぐ把へられた。

怖い話をしてきかさうといふ兵衛の言葉。それは、天龍の川遊びをあてつけた話で、水右衛門と不義をしたかと言はぬばかりに證據の品と、菊唐草の香箱を突きつけられた。

今はこれまでと、切つた指まで見せて、おらいは兵助やおときの兄妹のことを頼まうとしたが、兵衛はもう聞き入れなかつた。

性根の腐つたおれの口から、いらざる世話立、まづそれよりは不義者覺悟。

きらりと白刃が、鼻さきをかすめた。おらいは突嗟に手燭を投げた。水右衛門から渡された小判が、ばらりと壘へ散つた。

もし、これ御覽じて下さりませ。その金あなたへお見せ申すが眞の不義ではない證據、こりや悴兵助どのその夜に奪ひ取られし一千兩の金子、松といふ字の館の極印、盜賊は水右衛門。

なんと。

さあ、とてもわたしは覺悟の前。あの水右衛門が見つけたる娘が不義の身代りに。

や。

身は穢さねど長らへては、お前の武士の立たぬ譯。死んだ

跡ではその金の極印證據に詮議して義理あるわが子兵助が、勘當許して下さりませ。これがこの世の願ひぢやわいなあ。

でかした女房。

兵衛はおらいの本心を知つてゐた。しかし、水右衛門から香箱を證據に、不義したと正面からきりだされると、今更そのまゝに置くことも出来ぬ立場になつてゐた。

おらいは既に覺悟してゐる。兵衛としては水右衛門に鼻明かせるため、妻を首にするの外はなかつた。兵助の勘當赦免は父も元より望むところだし、おらいの貞節もよくわかつてゐた。たゞ武士であるために兵衛は妻を斬らねばならなかつた。

障子に飛ぶ血しぶき。生々しいおらいの首。

それは、その夜の百物語を目の前に、そのどれよりも怖ろしいありのまゝの物凄さと、なまぐさい血の匂ひを湛へてゐた。

池の蛙が一しきり鳴いて、風がさわくと枝をならした。

また、水右衛門が圍ひに忍び寄つた時、手に觸れたのは、まだ血の温みさへ残つてゐる女の生首だつた。

はつとした時、手燭を持つて現れた兵衛の姿にぎよつとしたが、そしらぬ顔。

間男の水右衛門と呼ばれても、大小を投げだして、辯解と陳謝とを繰り返すばかりだつた。

しかし、證據の極印金には通れる道が無かつた。それでも水右衛門は周章でなかつた。

不意に兵衛の隙を見て斬りつけた。一足下つて抜き合せた兵衛の脇腹へ、ぐつと刀を突込んだ者がある。八之亟である卑怯、騙し討、無念。

さうした言葉もだん／＼細い唸き聲と變つて行く。

八之亟、官六、運八などいふ悪黨どもが、たゞみかけて斬り込んで行くのを、水右衛門は糞を吹かしながら見てゐる。

八之亟が危くなる、藤四郎まで加勢して兵衛の足へ斬りつけた。多勢に無勢、弱りきつた兵衛へ、居ながら槍をつける水右衛門の憎々しさ、止めまでさして、伽羅木の觀世音を奪ひ取つて、悠々とひきあける。

關助の駈けつけた時は、遅かつた。

あたりは慘たらしい血の海だつた。

赤堀水右衛門の悪逆は當然仇討といふ問題が起らねばならなかつた。水右衛門は兵衛を殺したばかりでなく、間接にもらいをも殺してゐる。極印金の盜賊でもある。

半次郎はおときの聲として敵討の旅に出ねばならない。勳當をゆるされた兵助も父の敵であり、また自分の敵である。

しかし、兵助は盲目になつた、め大井川で返り討にあふ。半次郎は弱年といふので、姉の三木十左衛門が主家を辭

して、助太刀に出る。石井家譜代の家來である中野藤兵衛夫婦が兵助のために陰になり陽になつて力を盡くすが、水右衛門にも恩をきてゐる人もある。

八ッ橋村に追ひつめた十左衛門は、義理に迫つて一旦水右衛門を見逃すが、その足には手裏劍が打たれてゐた。

歩行困難となつた水右衛門は、うまく騙されて、庄兵衛と關助の駕籠に乗せられ、伊勢龜山の城下へ擔ぎ込まれた。

そこには敵討の用意が、すつかり整へられてゐた。十左衛門を後見に、半次郎と、姉の岡野が、父や兄弟のために必死の働きをするのだつた。

赤堀水右衛門も悪運盡きて討たれた。世に傳へられる、龜山の仇討といふのはこの物語である。

附記 「花高浦浮木龜山」といふ狂言の物語がこれである。錦繪で

評判の鼻高幸四郎の悪逆赤堀水右衛門の憎々しさは、いふ迄もなく、大井川の返り討が見せ場である。高助の十左衛門の八ッ橋村の場も芝居らしい性念場である。しかし、昔の狂言作者は端場にもまた面白さを残してゐる。時候柄、言はず事件の發端に近い百物語を主として書いたのは、怪談を書きさうで怪談を避けた懐きと、興味深い構成でありながらあまり知られてゐない場面を紹介した方が珍らしいと思つた老婆心からである。純然たる夏狂言ではないが、夏向の場面の多いものである。

大磯中心

劇化

メロドラマにの進み出す
家庭劇

山 上 貞 一

七月一日よりの三の替り狂言のプランも
ほど出来た時、突然、折柄書房の店頭を飾
つた婦人雑誌の呼び物「戀の未來花大磯坂
田山心中」を上演せよとの命令が降つた。
早速と社長、多田常務、鳥江君、私の四
人が朝日座へ「天國に結ぶ戀」を見に行つ
た。映畫は前半徒らに冗長で、後半のセン
チが僅かに客席の涙をそそつてゐる。これ
を参考として婦人雑誌の記事を参酌して社
長室での劇化プランは急速に進んで、鳥江
君が脚本を書いて私が舞臺監督をすることに
話しは決定した。

浪花座で六月一日から開演した復興松竹家庭劇は、文字そ
のまゝに素晴らしい復興振りを見せて連日の満員、二の替り
になつて更に好評を博して、目下道頓堀の籠兒となつて七月
も打續けることとなつた。

私達關係者一同の感謝と歡喜はもとより白井社長も非常に
乗氣になられて、毎夜のやうに芝居を見て毎夜のやうに駄目
を出されて、芝居を益々面白く愈々完璧なものにしやうとの
意氣込みで、實に和やかに然し忙がしい日が續いた。

「愛よ、天國まで」四場、第一場は聖堂に芽ぐむ戀で三光教
會の會堂を見せ第二場は愛の草花で東京芝なる銀行重役圖書
家の客室を見せ第三場は青葉の悲歌で大磯なる坂田山中を見
せ、第四場は姿なき結婚で圖書家に於ける告別式の前夜を見
せた鳥江鎮也君作る處の脚本である。

もとより題材が題材だからメロドラマに相違ひない。又現
在の家庭劇を商業劇團として最も健全に發達さし得るものは
いづれの點より見るもメロドラマ以外に進出の途はない。



メロドラマだか
ら愚劇だ
とまさか
言へまい
最近演劇
界の論調
はメロド
ラマの提
唱に連れ
て、更に
メロドラ
マの淨化
即ち卑俗
化より救
へと叫ば
れてゐる
私も大い
に賛成で
あるが、
その劇團

の持つ観客層を無視して劇團の生長はない。観客に媚びる劇團でありたくないが、観客層と緊密に握手して共に進展して行く劇團なれば、喜劇結構、新派結構、ひたすら精進して行けることと信じてゐる。

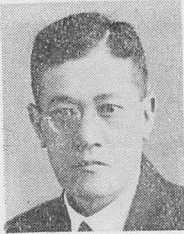
私は最近家庭劇の一員として演劇に對する論點のすべてを實踐的にしか考察しない事にしてゐる。と共に家庭劇のために百萬の観客をこそ求めるが、卓上の空論には耳を藉さない主義にしてゐることを敢て附記する。

一流第一世界共名
山葉ピアノ
山葉オルガン

型録月賦規定進呈

日本楽器會社大阪支店
 西區四ツ橋町 電話(新町)：073

ランジヤン



オリオンピツク

一ヶ月十萬圓の消費法

一ヶ月中に費消してもいゝお金が十萬圓あつたら……貴方はどんなにしてお使ひなさいますか……と、目下浪花座に出演の家庭劇の皆様に御尋ね申上りましたら次の様な面白いお返事が参りました但し、この費消については、投機的事業に依らないことといふ條件のあつた事も附記しておきます

尙原稿は到着順に掲載させていきました。

小織桂一郎

一ヶ月十萬圓の
収入が有たら何う
消費するつて？
答へは甚だ簡單明
瞭でさあ。心を許

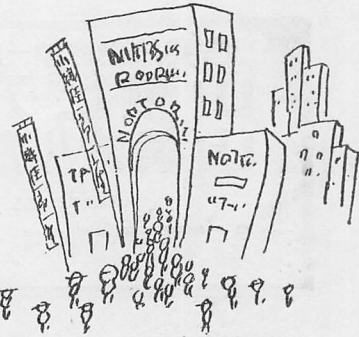
す同志を引率して早速演劇行脚に世界漫遊と出掛ます。一ヶ月十萬圓の一年で百貳拾萬圓。これだけ資金が豊富なら、まことに朗らかな研究的の巡業が出来ますよ。え？ 支出の明細表？ そんなものは憚りながら何歴にでも御得心の行くやうに調製しますが。然かし眞當に出資してく

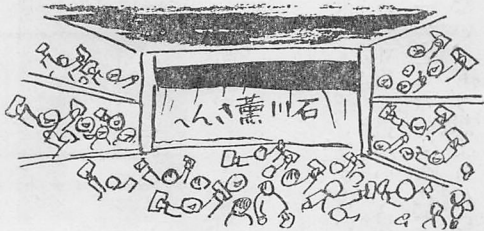
れるんですか。時節柄もつと安上がりの方が宜かありませんか。なあと座組の顔振れ次第で、経費なんざあ伸縮自在ですぜ。



石河 薫

百萬圓でしたら家も買つて自動車も買ひ理想的に劇團もこしらへ松竹の大株主でそして女重役にもなりませうが拾萬圓





では餘りに少額で困つて仕舞ひます。御命令ですか。拾萬圓で計畫を立て、見ました。

三井さんの向うを張るわけではありませんが、國家非常時に當り思想の悪化を幾分でも防ぐ事

は意義のある事と思ひます。で方法として失業者の皆さんに一日五百人を限り先づ芝居を見て頂きます。勿論お辨當から家族へのおみやげも付けます。そして幹部總出動でお客様以上に優遇して助らかな気分になつて頂きます。これを三十日間續けます。延人員一萬五千人、費用一人宛貳圓として金參萬圓也。残額の金七萬圓は招待者一萬五千人から

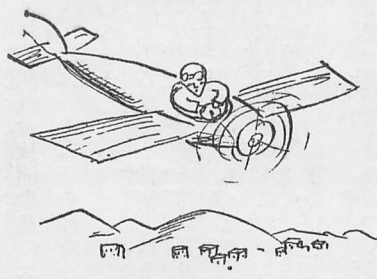
特に抽籤を以つて參千五百人を選び平均二十圓づつ、を生業資金として差上げます。私のくだらない計畫の爲め大道のアイスクリーム屋さんが殖えます。風船屋さんから夜店商人等色々と數を増すでせう。或る方面からは都市の美觀上又は交通上問題などとお叱りを受けるでせうが、國家非常の時、かんべんして頂きます。



元安 豊

東京、大阪、京都の美妓代表的のものを各五名宛選出しこれに各地女將一人宛に二三名、通辯一名自分と共に二十名快速旅客飛行機二臺に分乗、霞ヶ浦飛行場より出發東行 桑 港 ロサンゼルス迄一飛びしロサンゼルスにて下乗ハリウッド撮影場を見物後中部アメリカの風光を車窓に眺め乍ら特急にてシカゴに向け出發ナイアガラ瀧を見物して再び列車に便乗

ニューヨークにて第五街(Fifth Avenue)芝居街(Theater Street)を自動車にて一巡し一夕紐育セントラルパークにてテレビジョン放送装置を依頼し美妓の日本舞を數番實演し放送料の收入を得て更に紐育より飛行機にて大西洋横斷ロンドンに向つて出發ロンドンの最も完備せるホテルに一泊し其夜大夜會の宴を催し餘興に日本美妓のカツボレを公演し裏町貧民街を一巡して百ポンド(千圓)を寄贈し翌日はピカデリー散策、翌日はウインブル城を見物して午後は芝生にてピクニックパーティーを催し後旅客飛行機にてパリへ向け出發途中ドーバ海峽を下に見ながら機中漫談會開催パリ到着後はオペラ座にてタ



ンホイザーの歌劇を見物、次でルーブル美術館のミロのゾーナス像と日本美妓との美を競はしめ女連をモンソー公園に遣り筆者は巴里夜の女の歡樂を味ひ更に翌日はロンシャンの競馬に賭け再び伯林に向け出發チアガルテンにて記念撮影の後瑞典に飛び水の都の自然美をめでて歸路を印度洋に取り支那を横斷して日本に歸着。

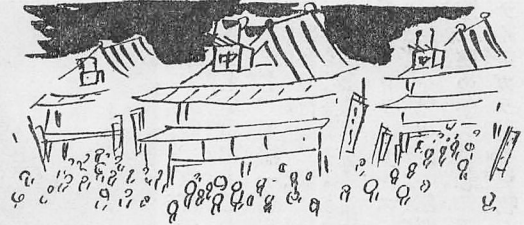
一夜大臣の夢又如斯！



東 愛子

時節柄ホントに飛拍子もない課題です。

それだけに随分興味的な考へも湧いて來ますが扱、何か書いて見様と思ひ立つと一寸胸に畫がいて見たプランが全く統一のとれないものになつて、とりとめもない、もう想より外に浮んで來ません。



れやそうですもの。

これ迄に一度だつて拾萬圓の費消法なんて事を夢更考へた事もないんです。

松澤村の芦原將軍様に一度伺ひを立て、見様か知ら？

何んと仰しやるかしら。多分『滿蒙新國家の開發に投資して日本の失業者を自から引率して金鑛發見に出かけて國家に裨益せよ』

あ、恐ろしい!!

いくら拾萬圓あつても女の身空では考へも及ばぬ事。それこそ十萬圓所か十萬億土に飛び込む様なものですわ。

ぢやヤツパリ時節柄社會救濟事業にスツパリ寄附して了はふかしら。そうそう私ひの事を思ひつきましたわ、

人間の心の糧である演劇や音楽とは全く没交渉に何等の慰安も亦興味的な要素も失つて生活線上の下積みになつて唯うごめき喘ぐ憐れな人達にホントに心からなる慰安の一日を與へて上げたいと思ひます。

道頓堀の五座を一週間位買ひ切つて是等の人の爲に解放し、なごやかなシットリとした劇場氣分にユツタリとひたらし上げて、せめて一日でもいい御馳走もしませう。そうして食と共に娛樂的な興味を味つて精神的にも肉體的にも砂漠のオーアシスの上に休んで戴いたらどんなに愉快な事だと思ひます。

ホントに實行出来る時がこないものかしら……。剩餘金の全部は貧困兒童の救濟並に教育資金の一部に寄附します。これで私もすがすがしいサツパリとした氣持になりました。

在りし日の 勘彌を偲ぶ



斧定九郎・勘彌

倉田啓明

將來の大成就を期待されながら、夭折した俳優は、三十年ばかりの間に、かなり多勢ある。ちよつと數へてみても、尾上菊次郎、中村又五郎、江原崎國太郎、尾上榮三郎、同泰次郎、澤村宗之助——まだ思ひ出せば二三人はあるだらう。殊に菊次郎、宗之助、國太郎、榮三郎の死は、女形拂底の歌舞伎で愛憎痛恨の極みだ

つた。それに又五郎はしばらく私が彼のために仕事をしつゝ、關係上、個人的に哀悼に耐へなかつた。そして遺子の又五郎が成長して、先月の中座に出でるたのを見て感慨をおぼえたのだが、それから數日経つて、守田勘彌の暴逝に接した洵に慨然として長歎息せざるを得ない。

勘彌が往年市村座で、菊吉と一座してゐた頃は、二枚目役者として、いつも白く塗つてゐた。その時代の勘彌を、私は餘り注目しなかつた。然し彼も時代の風雲兒だつたと見えて、林和君と文藝座を起して、新劇の旗をひるがへし、武者小路氏の作品などをさかんに演出して、新しい俳優として世間から認められるやうになつたが、それでも私は文藝座の所演を一度か二度見ただけで、さう大して感服もしなかつた。

ところがその後、たしか四谷にあつた大國座で、彼の「一條大藏卿」と「油殺女地獄」を見て、巧い役者だなど感心し

た。大藏卿は既に、鷹治郎、中車、吉右衛門等が得意とするところだが、勘彌のそれは、これ等の先輩に伍しても、遜色のない立派なものだつた。それに河内屋

與兵衛は、近松の原作を科白劇にして帝劇の女優を相手に演じたものだが、これはすつかり敬服した。一部の批評家は大阪の蕩兒にはなつてゐない。江戸の蕩兒だといつた人もあるが、それは餘りに偏狹な考で、近松の傑作をあまりに郷土

名和長年・成田堯心

勘彌



藝術視し過ぎては面白くない。勘彌の與兵衛でも「冥途の飛脚」の忠兵衛でも、立派に原作を生かしてゐる佳作だと信ずる。つまりこの時、私は彼の凡手でないことを知つたのだ。

「忠直卿行状記」は彼の新劇の手腕を世に示したもので好評だつたが、それ以上には高く買つたわけだ。その後、新富座で岡鬼太郎氏の横櫛お富の新作を、喜多村のお富で、與三郎を演じたのを見たが、脚本もよかつたが、演技も優れてゐた。

既にそれ以前だつたらう、彼が市村座を脱退して、帝劇へ入つたのは——私は彼の市村座脱退を惜んだものだ。その頃の帝劇の芝居は私等にはあきたりなかつた。どうもお上りさんのための芝居といふ観があつたからである。そこへ勘彌が入ると聞くと、甚だ残念に考へたものだ。ところが妙な縁で、私の書いた「本朝王昭君」といふ作品が、帝劇の脚光

を浴びることになつたが、これは勿論、梅幸、幸四郎の芝居で、勘彌はワキ役の比叡の學僧慶雲といふ、戀と信仰の矛盾に悩む、若き僧に扮したのだつたが、あらかじめ私は勘彌を視つて書いたので、やはり第一の出来だつた。むつかしい天台學の術語などもすらくと言つて、さすがに新時代の俳優らしい、頭腦のよさに感服した。

帝劇に入つてからの勘彌は、實に重疊な役者として珍重されたやうだ。二枚目はむろん、老役さへ屢々やつて成功を見た。それが大阪で、近年「名和長年」の堯心に扮して、松助の藝境を奪つた感があるのは、まだ人の記憶に新しいことである。考へるとたしかに彼の藝の領域は廣かつた。たとへば「忠臣蔵」で、由良之助、若狭之介、勘平、師直、判官、平右衛門、定九郎等のいづれを演じても相當にやりこなせるのは、恐らく當代彼一人であらう。殊に定九郎と判官を見た



彌 勘・トツレムハ

がいゝ出来だつた。こんな器用な俳優は
 まつたく珍らしい。
 昨年の南座の顔見世が、關西での最後
 の舞臺になつたが、その時の「良寛と
 子守」の良寛は、出色の出来で、昨年
 度の顔見世中で面白かつたのはこれ一つ
 である。十年、十五年の後には一座の頭
 目になるべき器でありながら、忽焉と
 して幽明界を隔てたのは何としても惜し
 い。わが劇壇は秀才の長男に先立たれた
 やうな感があるではないか。

オリヂナル
粉白粉

ルナヂリオ 粉白水

湯あがりに
サラットつけた
淡化粧!
またこのもしい
ものです。

濃さもツキも
共によい……
早化粧として
最も好適……

堂筒井藤安社魯式株



坂東好太郎

父に語る

坂東好太郎

日は去り、時は進み、此の世に生を得て廿二回の春を送つた今日まで、僕はまだ父の愛を知らない。おそらくは、一生を通じて眞の父の愛を知らずに終らう!!

僕が一生を通じて唯一の頼りとしてゐた、慈愛深き母も、健太郎の今日を知らずして他界へ去つてしまつた。……生れて間の無い小犬が母親の乳房をもとめ、温かい親の胸に抱かれて、安かなる夢路

情ある母、そして父さんも今は此の世には居らないのだ……
健太郎よ!! と暖い聲をかけてくれる母は、僕を置いて、唯一人淋しい長い旅路に昇つたのだ。いくら呼んでも、逝いた母は歸つて来てはくれないのだ!!
思ふまい〜として、ありし日の母の

姿を忘る、事は出来なかつた、だが何事も運命と諦めて、母をなくした後の自分は、藝を唯一の母とし、なほ亦生れて今日迄一度も、父とは呼ばないが、自分には父親がある、何日かは、情ある兩の手を廣げ、母と同じく温い心で健太郎よ!! と呼んでくれる日が来るであらうと、唯それを樂しみに、悲しい時苦しい折には總てをその望に依つて忘れ、慰められて來たのだつたが……。
噫々それなのに!! それなのに!!

何と言ふ運命の神は皮肉だらう？

母をうばつた運命は、今また、僕の唯一の望……力……父までうばつてしまつたのだ!!

握り力の限り、怒りさげび續けたが、一度うばひ去られた父を、再び返してはくれなかつた。

命の神に負てしまつた。生れて一度もお父様と呼ばずに、亦健太郎と呼んではくれずに、情なの父は死んでしまつたのだ

僕は亦淋しい思ひをして此の世に唯一人残されてしまつた……。

なぜ會はしてくれなかつた？ 一目だけでも生ある時の父に會はしてはくれなかつたのか？……

○
今は逝きたる父よ!!

健太郎が、いとしいと思はれたら、此の



同じ様に、僕頭をお父様からなせて戴きたかつた事でせう。だが、少年時代の夢は無残にも破られてしまひました。……

母様も、父の事は多くは語られなかつた、僕もそれ以上母に對して父様の事は、御聞きしなかつた。

なればこそ、母様はどんなにか、僕を愛して下された事でせう。

そうした母を見る時、一言でも父様の事は母に聞きたくはなかつた。けれど心の中ではどんなにか、父様の事を思つてゐた事でせう、お慕ひ申してゐた事でせう？

そして、母様は、女だけに、僕より以上

て日増につる父懸しさのねんを、深く胸に秘め舞臺を去り、映畫界に入つた時

健太郎のさげびを、お聞き下さい。……

健太郎は未だ効かりし時、どんなに、父をお慕ひした事でせう。そしてお母様と

健太郎のさげびを、お聞き下さい。……

健太郎は未だ効かりし時、どんなに、父をお慕ひした事でせう。そしてお母様と

悲しみ、苦しみを胸に秘め、心を残して世を去られてしまったのです。今にして思へば、母様の御心中、如何ばかりであつたか、しのばれました。

母に逝かれた後は、自分の力を頼りに少しでも、お父様の御満足の行くよう、逝きたる母に安心させた、微力乍ら努力を續けて來ました、そして唯一の望み將來を!! 今にお父様と呼ばれる時が來るであらうと、はかない望みではあつたが、僕にとつては、何よりも強い望みでした、それなのに僕のこうした、希望を外に。つひにお父様は僕の望を、聞入れては下さらずに、今は返らぬ旅路へ……母も泣いて居られるでせう。だが母は幸ひだ、お父様にお會ひする事が出来るのです、語り會ふ事が出来るのです。

だが、健太郎は淋しく残されたのです、健太郎は、唯一人悲しく、ありし日の父のお姿を描いて、晴れやらぬ日を送

つて居ります。

なぜ一度だけでも、お父様と呼ばせ、健太郎と呼んでは下さらなかつたのです。只健太郎は、それだけを、おうらみに思ひます……。

でもいたし方はありません、運命の神に負けた、僕は、どうする事も出来ないのです。

健太郎はお父様の子です、必ずや、父の子として恥かしからぬ者になつて見せます。

御生前中に孝行の出来なかつた健太郎此上は只々藝道に精進して、一人前の者になつた其時、おそまき作ら、これが何より父に對する孝と思ひます、お父様の御意志をついだ事と存じます。どうぞ其日の來るのを、母と共に、御待ら下さいます様、健太郎が一生の御願ひで御座います。

では健太郎の事は御心配なく、安らかに眠り下さるよう神に祈りませう。

中口殺菌劑

衛生口錠

ルーカ

口入り病を防ぎ
精神爽快に

株式会社 安藤井堂製薬部



大阪で死んだ

守田勘彌

山上貞一

緊張した一瞬の後、寝臺車は動いた。わつと息子のしうかが泣く。甥の義助がよゝと聲をあける。寝臺車の窓枠をいまにも滑り落ちそうに揺れる白羽二重に包まれた遺骨を力なく抱きしめて君子未亡人も最後の挨拶を見送りの人々にそつと交した。

斯うして我が守田勘彌の遺骨は奇しくも終焉の地となつた旅空大阪の地を離れて行つた。白井社長はハンカチで眼頭をおさえる。吉右衛門の硬ばつた

頬に幾條となく涙がつたふ。フラツシユの白光、大阪各座の敷え切れぬ提灯が冥路の明りとなつて、妻女君子、息子しうか、息女好子、實兄深野英二、姉さだ、甥義助、富久、そして門弟の彌三郎と喜の字の九人に護られて遺骨は東京へと歸つた。時惟昭和七年六月十八日午後十時四十分、一代の名優我が十三世守田勘彌の遺骨は東京へと歸つて行つた。
こんな筈で大阪へ迎えた勘彌ではな

かつたのにと思ふと、寂しくも哀れな思ひで胸が痛む。然し、もし強いて心を慰まむとすれば、若し舞臺的には絶望を宣せられた彼が假に壽命にのみ恵まれて幾年かの後、世人から忘失された後寂しく消えて行くと思像するともまだ慰むべきことが多い。現に死を報じた新聞は筆を揃えて目前に迫る勘彌時代を俟たずに死んだと悼んでゐるではないか。

朝來雨の降りつゞく六月十六日午前十時三十五分、勘彌は享年四十八歳で奇病の鼻疾から來た心臓麻痺を起して寂しく阪大病院南館三階の二號室で長逝した。枕頭にあつたはしうか、君子、好子、彌三郎、喜の字の一家で、その夜九時三十分、急遽來阪された深野、さだ、義助、富久の遺族を待つて協議の上、遺骸は笠屋町なる白井社長邸へと引取られた。手入の行届いた奥庭を前に十疊の日本座敷に本床を背後に安らかにねむつてゐる姿は、決して

旅人の死の姿ではなかつた。半眼をうすく開いていまだ血の氣の失せない顔には病中のやつれも見えず、たゞ鼻頭を被ふガーゼのみ痛ましく、實に安らかな往生を見て、胸をつくものは只管惜しい惜しい彼の舞臺である。歌舞伎俳優として新劇俳優として彼の足跡はすでに偉大なるものがあるが、今後十年、五年、彌勤時代は雄々しくも展開されるであらうことを想像すれば、彼の死は彼の爲にも劇界のためにも正に切齒扼腕だ。死すべき人でない。死なすべき人ではない。内閣印刷局に囁する實兄が「代つてやれるものなら……」と言葉すくなく洩されたのも兄弟の情として察すべきものがある。通夜の夜は更けて黒い額におさまつた故人の肖像を前に膝を交えるものの胸にはひとしく此の若くして逝つた故人への追慕の念のみが痛ましくも湧いた。

故人の舞臺を観たのは昨年十二月南座での顔見世の時が最後であつた。そ

………骨遺の彌勤の出を邸井白………

野深兄實、助義東坂、かうし東坂、長會竹松井白りよ左方前
氏諸の一貞上山、郎三彌東坂、子好女長、人亡未子君、二英



の頃既に鼻の奇病に就ては世上に種々な流言があつた。

「もうなんともないのです。實に結構なお蔭を頂きましたよ。私の壽命はこの八月で無かつたのを、神様に全く助けて頂いたんですから、もう私には醫師の力は及びません。たゞ信仰です。私も此頃はよく信心といふことが解つ

て來ましたから、大丈夫ですよ」

と樂屋で「關の扉」の宗貞に扮した彌勤が私の眼には確かに肥大してゐると見える鼻頭を否定しつゝ、金光教とそ

の信仰論をやつたのが思ひ出される。

私は故人が解つたといふ信心こそ慢心であつて眞の理解でないことを警しめ

たが、素直な故人はその私の言葉に共

鳴して、「有難いことを聞かして貰つた」と子供のやうに嬉んでゐた。その頃から私は故人の信仰に就て非常な危険性を認め出してゐた。

金光教徒としての私が、遺族の人達から聞く手續教會長の言動には不審の點多く、稍ともすれば教義を誤解さす點が多いのに驚かされてゐた。「薬れ祈れ」の神言に對して「病院を獄舎なり」と喝破するが如き教師のもとで新人としての勸彌に醫科學を否定し神のみを信するが生ける道なりと言進さしたとすれば……私は教職の任の重きを責めた。

一月十二日のことと聞く。東京歌舞伎座初春興行に「勿來關」の大江匠房「石切棍原」の六郎大夫、「小猿七之助」の浪人——を演じてゐた勸彌のあまりにも肥大した鼻頭を見て、折柄觀劇會をしてゐた後援會の人達が妻女にその休演を勧めたのが最後の舞臺であるといふ。半月後の二月に彼は妻女と

共に金光教本部なる岡山縣金光町の吉備乃家に宿つて、たゞ信仰にのみ復活を希ふ人となつてゐた。二月、三月、四月、その間信仰もさる事ながら醫藥の力と併せ得て快癒するやうと兄の三津五郎や先輩の梅幸、家族はもとより後援會よりも特使は幾度か故人を訪ねたが、信念が厚かつたのか故人が動かうとしない中にも、面談した人々の口からは決して快方に向つてゐない悲觀的な話のみが傳はつた。

四月大阪中座に出演したいうかは打上げの日を待兼ねて金光町に急いだこの以前から「東京へ歸つて病院へ這入れ」との一族の決議書を持つて實兄が往來されたりして周圍は打捨て難き状態にはなつてゐた。又白井氏より藤治郎へ、和田博士へ、そして金光教信徒であり醫學士の高村信太郎氏へと話しは運ばれて、この信徒であり醫學士である高村氏の意見に依つて一先づ大阪の大學病院へ匿名入院することとな

つて、參籠三ヶ月で病勸彌は金光町を去つたのである。

處が阪大病院に入つた勸彌は衰弱甚だしくまづ内臟器關の恢復をはからねば患部の手術にもかゝれない人となつてゐた。四月廿七日入院後五月は夢と過ぎ、六月始めには危篤が報ぜられそれは誤聞だと訂正されたり、漸く阪大病院の廊下に人足が繁かつたが、聞く處では阪大では既に舞臺上絶望を最初の診察で、家族以外の親近者に語つてゐたと言ふ。

六月六日東劇を打上げたいうのが來阪した。三津五郎代理として義助が來た。實兄深野氏が日曜を利用して來阪し即日歸京するのを、故人は名残り惜しげに寂しく見送つたことなどは、後にして思へば死の豫感が既にあつたのであらう。

十五日に堂島川を水都祭で藝術牌を貫つた石河薫の裝飾船が上つて行くのを、ベツトを釣上げさせて病室の窓か

ら見下し、山上さんも乗つてゐるのか
いと私の姿を求めてくれたといふ。
夜になつて雨が降り出した。しうかは
清水町の最氣先に、彌三郎は左膳堂の
宿に歸つた。後では頻りに人懐かしく
人戀しく、四邊を見廻しては寂しげに
吐息を洩してゐたといふ。そして最後
の朝は来たのであつた。
私の書きたいことは仲々盡きない。
だが、いくら書いても故人が笑ひ顔を
見せてくれるものでない。つまらない

と怒つてすらもくれない。いまはたゞ
遺骨が大阪を去るまでのことをざつと
書いて筆を擱かう。
十七日、午前十時白井邸に於て金光
教大阪教會長白神教正の手に依つて
遷靈祭が行なはれ、正午より告別式と
なつた。鴈治郎を始め大阪俳優全部、
吉右衛門、幸四郎を始め在大阪東京俳
優全部、大日本麥酒釀泉の山本爲三郎
氏を始め名士名流は踵を接して参拜さ
れた。午後五時阿部野葬儀場で密葬さ

れ、その夜茶毘に附せられた。
十八日午前九時に遺族達で遺骨は上
けられて再び白井邸の奥座敷に安置さ
れた。そしてその夜の十時四十分大阪
驛發で劇團關係者に賑々しく見送られ
たのであつた。その間に於ける白井社
長の死者への心盡しは涙ぐましいもの
があつた。これも故人がその人徳の然
らしむる處であることを思ふにつけて
惜しき人を、實に惜しき俳優を喪つた
ことを大書して、神上つた故人の安か
れかしと祈る。(東京なる告別式の夜記)

洋酒界の革命兒……國産洋酒の逸品

國産金鶴印

ブウキスデ
ベラモンツ
キルモツ
ペユルミ
ジパ一ミ
滋養葡萄
酒



發賣元 株式會社 橫山商店

大阪東區豐後町番地
電話東(94)三〇三
一六六一
九四六四

お話し



す。不思議なことには一月五日の一週間位以前から私は毎晩つゞけて夜明けの四時か

「あの時ばかりはぞつとした！」その、「あの

時」のお話を、七月の角座に出演する新聲劇

の皆様から公開して頂きました。

(原稿は到着順に掲載いたします)

スーツ.....

廊下に消えた足音

恩師松井須磨子の死

辻野良一

忘れもせぬ大正八年一月五日、それは私の先生松井須磨子さんの變死の日です。

當時私は藝術俱樂部(松井さんの家)に起居してゐたので

七月の各座

松竹家庭劇 浪花座

十二月・夜五時半・二回開演

第一 御一人様で満員 一場

そこには、もう美しい令嬢が這入つてゐる。道入れない所へ這入りたいのが、人情です。況してや、驟雨です。喧嘩——戀——手段——等が當然、起るべき、其處は一體どこでせう。

雨の公園口

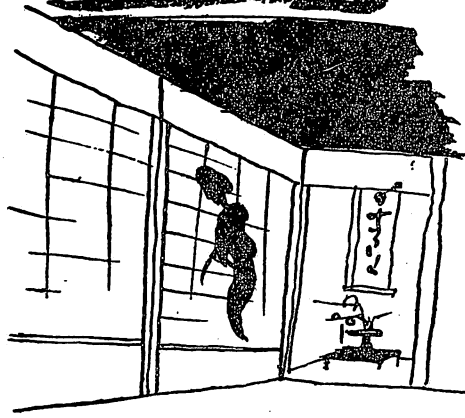
小愛	モ小	煙	運	令	緋	詰	藝	僧	ル	女	出	荷	娘	妻	小	
間	草	轉	手	嬢	着	襟				の	前	物	背	負	つ	
使	人	ガ	森	屋	伊	江	口	富		ン	物	前	負	つ	た	
お	野	竹	伊	江	口	富	口	富		ン	物	前	負	つ	た	
	本	原	東	仙	男	男	男	男		ン	物	前	負	つ	た	
	敬	高	仙	男	男	男	男	男		ン	物	前	負	つ	た	
	清	一	助	作	子	子	子	子		ン	物	前	負	つ	た	
浅	元	村	山	天	澁	春	左	加	御	致	喜	市	時	京	石	橘
妻	安	田	田	谷	日	藤	室	久	郷	川	多	喜	彌	助	子	代
明	智	隆	天	美	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二	二
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

ら六時頃まで必ず目が醒めて胸騒ぎがして睡れなかつたのです。

この五日の其の時間にも又睡れなかつたのでまだ起きるには早し、仕方なく床の中

でウツラウツラしてゐました。

すると、すると、私の二階の部屋の方へ誰れか上つて来る様な気がするので、否たしかに足音です、バタ／＼と力ないかすかな音です、こんな時間にと私は何だか氣持が悪くなつたので蒲團を頭からかぶつてしまひました、すると、するとです、その足音が私の部屋の前で止つたのです、たしかにとまりました、私は暫く呼吸をこらえてじつとしてゐたのです、其の間はとても永い様に感じました暫くするとその足音は力なく又ハタ／＼と歩き出した様でした、私は名状し難い



不快な思ひで努めて睡らうとあせりましたが少しも睡れません。ところが、それから暫く、小一時間も立つたでせう、裏の物置の方で、バタツと云ふ何か物が、ひつくりかえる音です、それも大きなものらしいのです、さつきからの不安で私の神経は一時にちぢみ上つてしまひました、それでも芝居のつかれの爲か、いつとはなしに寝入つてしまつた様です。すると突然「辻野さん」辻野さん」と大聲でよび起されました、見ると下女が、土瓶を片手に真青な顔をして部屋の前に立つてゐるのです。裏の物置で先生が死んでゐる……といふのです。私はこの言葉にハツとしました、或は？と思ひ恐る／＼物置へ行つて見ました。「アツ」やつぱり物置の中に先生がぶら下つてゐる

通行の男女 大ぜい

第二 ヨツトの舵

ヨツトは走つてゐる。快く晴れた海上を……
けれど斜めなのに、よく顔覆しないものだ。
舵ですよ。見えないう水深くある、舵の力です
よ。妻も、此やうな舵の取り方だと圓満だ。

1 海岸のある茶店

その附近の旅館

2 水客

水客 B A ち

海老の母

水客 B A ち

青年の母

水客 B A ち

村原の妻

水客 B A ち

河原の妻

水客 B A ち

女中の泊

水客 B A ち

第三 大磯

愛よ・天國まで

巖奇的話題になつた心中

彼氏彼女とは、現世では、形容なくして悲し
き結婚は許された二人で、樂しうが、戀は果
敢なしと云ひ得ませうか、樂しと云ひ得ませ
うか、それを知るは、又二人です。

第一場 聖堂に芽ぐむ戀(三光教會々堂)
第二場 愛の草花(芝の圖書家客室)

るではありませんか……

私は「ハッ」と一と縮み冷気がゾッと脊筋を走り、思はず眼先が暗くなりまして。これが、先生、松井須磨子さんの自殺です。

あとで考へるとその時の足音は先生だつたのです、物置の方で聞いた「バタツ」と云ふ音は先生が自殺の時踏臺にしてゐたテーブルを蹴つた時なのです。「あの時」あ、「あの時」實際今思ひ出しても本當にゾツとします。

身を引き込む様な

画面の暗影

土橋式トーキーフォーンの發明に絡まる話

和歌浦糸子



さあ「ゾツとした話」と云ふ課題なんですけれども實のところ私こまつてゐますの、何故と申しまして貴方俳優生活なんてものは普通世間と違つて別個の生活でございますから田舎へ行つた頃の想ひ出を辿ればゾツとした話や怪談めいた話題等は随分澤山持ち合せては居りますけれど扱と改めてこんな事がございましたと申上けるのは餘りに恥し事やら

第三場 青葉の戀歌（大磯坂田山）

女學生 第四場 妾な結婚（元の圖書家）

女學生 生島洋子

同 元田みさを

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

茂林寺文福作・土田新三郎脚色

第四幽霊雨後の月五景

フワリさか寤はれます。そこに悪心の悔悟があり裏面に義理と人情とがあらねばなりません

喜劇で怪談劇を上演する——既に皆々様には、

どんなだらうと、好奇心をお持ち下さる事と存

山田平翁 子助

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

御室郷子

春日美子

浪花千栄子

浪田裕子

村田幸子

石川榮子

市村多美子

高田光子

東馬久子

京藤二子

加藤桂子

橋本愛子

東田愛子

時田隆子

石河桂子

小糸桂子

文東子

柳東子

小柳東子

浅妻照子

天妻照子

元妻照子

春野音子

羽野音子

同 同

同 同

愚にもつかぬ事許りで御座います。それに皆さまも御承知の通り一般の御婦人達と比べまして比較的大物のくせに膽つ玉と申しますと、それは至つて小さくまるで三歳の幼女のやうに可愛らしいんで御座いますのホ、御免遊ばして……。

恰度一昨年の十一月の事で御座いまして、妹の和歌浦友子が亡くなりました時の事で御座います。

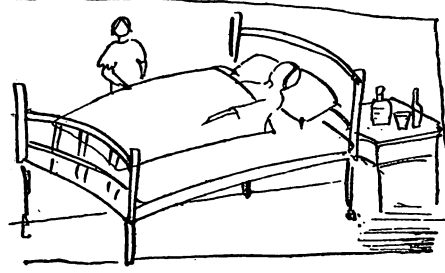
其以前から、叔父の息子の土橋兄弟が純日本製にてトーキーの録音を研究致して居りました、私達姉妹は兄弟の研究の爲めテスト臺になつた事は再三再四に止まりませんでした。テストの回数が重なる度毎に其の効果の益々良好になつて行くのが素人の私達にも判然と解つて、我が事のやうに喜び合つて一日も早く完成の日を待つてゐたのでございます。

榮冠を克ち得るの日は遂に來ました、長年の研鑽努力と血のじみ出るやうな苦心の賜は、土橋式トーキーオープン純國産として最後の試験を行つたのです。

其最後の試験臺は、妹の友子がなりました。會する人々は皆かたずを呑んで効果——その成果を待つてゐました。

其の頃友子はバセドール病で赤十字病院の一室に病臥してゐました。仲々の重態で刻一刻死線に近づいてゐるのが姉の私に判然と覗へてゐた位です。

「姉さん私本統に淋しい人間ですのよ」テスト用として作つた友子の自作自演映畫は今ほち切れそな健康の微笑を畫面に現はしています。朗かな肉聲で判然と私達に話



じます。その期待に添ひたく考案されましたのが「發聲幽靈雨後の月」です。發聲幽靈といふ割書からして奇抜ぢやありませんか……。

- 第一 田宮家の臺所
- 第二 田宮家の居間
- 第三 元伊三郎の臺所
- 第四 元伊三郎の居間
- 第五 離れ伊三郎座
- 第六 兼造
- 第七 富三
- 第八 富三
- 第九 富三
- 第十 富三
- 第十一 富三
- 第十二 富三
- 第十三 富三
- 第十四 富三
- 第十五 富三
- 第十六 富三
- 第十七 富三
- 第十八 富三
- 第十九 富三
- 第二十 富三
- 第二十一 富三
- 第二十二 富三
- 第二十三 富三
- 第二十四 富三
- 第二十五 富三
- 第二十六 富三
- 第二十七 富三
- 第二十八 富三
- 第二十九 富三
- 第三十 富三
- 第三十一 富三
- 第三十二 富三
- 第三十三 富三
- 第三十四 富三
- 第三十五 富三
- 第三十六 富三
- 第三十七 富三
- 第三十八 富三
- 第三十九 富三
- 第四十 富三
- 第四十一 富三
- 第四十二 富三
- 第四十三 富三
- 第四十四 富三
- 第四十五 富三
- 第四十六 富三
- 第四十七 富三
- 第四十八 富三
- 第四十九 富三
- 第五十 富三
- 第五十一 富三
- 第五十二 富三
- 第五十三 富三
- 第五十四 富三
- 第五十五 富三
- 第五十六 富三
- 第五十七 富三
- 第五十八 富三
- 第五十九 富三
- 第六十 富三
- 第六十一 富三
- 第六十二 富三
- 第六十三 富三
- 第六十四 富三
- 第六十五 富三
- 第六十六 富三
- 第六十七 富三
- 第六十八 富三
- 第六十九 富三
- 第七十 富三
- 第七十一 富三
- 第七十二 富三
- 第七十三 富三
- 第七十四 富三
- 第七十五 富三
- 第七十六 富三
- 第七十七 富三
- 第七十八 富三
- 第七十九 富三
- 第八十 富三
- 第八十一 富三
- 第八十二 富三
- 第八十三 富三
- 第八十四 富三
- 第八十五 富三
- 第八十六 富三
- 第八十七 富三
- 第八十八 富三
- 第八十九 富三
- 第九十 富三
- 第九十一 富三
- 第九十二 富三
- 第九十三 富三
- 第九十四 富三
- 第九十五 富三
- 第九十六 富三
- 第九十七 富三
- 第九十八 富三
- 第九十九 富三
- 第一百 富三

第五 蝸 牛 二場

第八方園福松作

- 第一 咖啡一九十八番のホール
- 第二 福田哲三の家
- 第三 藤田
- 第四 藤田
- 第五 藤田
- 第六 藤田
- 第七 藤田
- 第八 藤田
- 第九 藤田
- 第十 藤田
- 第十一 藤田
- 第十二 藤田
- 第十三 藤田
- 第十四 藤田
- 第十五 藤田
- 第十六 藤田
- 第十七 藤田
- 第十八 藤田
- 第十九 藤田
- 第二十 藤田
- 第二十一 藤田
- 第二十二 藤田
- 第二十三 藤田
- 第二十四 藤田
- 第二十五 藤田
- 第二十六 藤田
- 第二十七 藤田
- 第二十八 藤田
- 第二十九 藤田
- 第三十 藤田
- 第三十一 藤田
- 第三十二 藤田
- 第三十三 藤田
- 第三十四 藤田
- 第三十五 藤田
- 第三十六 藤田
- 第三十七 藤田
- 第三十八 藤田
- 第三十九 藤田
- 第四十 藤田
- 第四十一 藤田
- 第四十二 藤田
- 第四十三 藤田
- 第四十四 藤田
- 第四十五 藤田
- 第四十六 藤田
- 第四十七 藤田
- 第四十八 藤田
- 第四十九 藤田
- 第五十 藤田
- 第五十一 藤田
- 第五十二 藤田
- 第五十三 藤田
- 第五十四 藤田
- 第五十五 藤田
- 第五十六 藤田
- 第五十七 藤田
- 第五十八 藤田
- 第五十九 藤田
- 第六十 藤田
- 第六十一 藤田
- 第六十二 藤田
- 第六十三 藤田
- 第六十四 藤田
- 第六十五 藤田
- 第六十六 藤田
- 第六十七 藤田
- 第六十八 藤田
- 第六十九 藤田
- 第七十 藤田
- 第七十一 藤田
- 第七十二 藤田
- 第七十三 藤田
- 第七十四 藤田
- 第七十五 藤田
- 第七十六 藤田
- 第七十七 藤田
- 第七十八 藤田
- 第七十九 藤田
- 第八十 藤田
- 第八十一 藤田
- 第八十二 藤田
- 第八十三 藤田
- 第八十四 藤田
- 第八十五 藤田
- 第八十六 藤田
- 第八十七 藤田
- 第八十八 藤田
- 第八十九 藤田
- 第九十 藤田
- 第九十一 藤田
- 第九十二 藤田
- 第九十三 藤田
- 第九十四 藤田
- 第九十五 藤田
- 第九十六 藤田
- 第九十七 藤田
- 第九十八 藤田
- 第九十九 藤田
- 第一百 藤田

しかけてゐるではありませんか。

土橋兄弟は其の成功を有頂天になつて喜んで居ましたが、其時私の腦裡をかすめた真暗い影、私の身體がスート暗闇の奈落の底へ一歩一歩引づり込まれて行くやうな感じでしたのでございます。

晝面から現はれて来る健康な顔、晝面から洩れ聞える明朗な聲、それが今は病院に呻吟してゐる友子の姿であらうかと思ふと私はたまらなくなつて病院へ馳けつけたので御座います。

すると只さへ深閑として妙に押へつけられるやうな淋しい中にあはたごしい人の出入があるのです。ハット胸をつかれた私、いきなり友子の病室の扉を開けました、瞬間私の足は其處に棒立ちになつてしまつたのです、附添つてゐる人々の泣き張らした眸が一齊に私に向けられました。

「友子は死んだ」と茫然と行む私の意識は直感しました。

次の瞬間ザツ冷水を浴せられたやうな。

何ともいへぬ氣持。

土橋の宅では友子のテスト、あの明朗な聲を聞き、今は靜かな永眠せる顔をながめた時ほどゾツとした事は生れて初めです。

それから幾何もなく土橋式の名が松竹劇場のスクリーンに現はれました。全國的に名を馳せる事になつたので御座いますが、私に取りましては一番悲しい思ひ出になつてしまつたのでございます。

客 1イ 村上 輝 井田 高村 大雄
 女 給 田源 藏子 御室 安正 雄
 武 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 洋 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 社 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 會 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 女 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 福 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 福 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 二階の妻 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 百貨店仕入部 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 松岡の妻 丸 田源 藏子 御室 安正 雄
 正子の夫 丸 田源 藏子 御室 安正 雄

新聲劇角座

十二時・夜五時半・二回開演

「舞臺五月號所載野瀧梨演出
 河野義博作野瀧梨演出

第一 土と金 七場

第一場 小林利平の稲田

- 利平の長男 義弘
- 利平の次女 小林立
- 利平の姉 小林立
- 利平の妹 小林立
- 都立の女房 小林立
- 利平の長男 義弘
- 利平の次男 義弘
- 同黨地方組織部長 三木求一
- 農民黨 小林立
- 自作農 小林立
- 利平の次女 小林立
- 利平の姉 小林立
- 利平の妹 小林立
- 都立の女房 小林立
- 利平の長男 義弘
- 利平の次男 義弘
- 同黨地方組織部長 三木求一
- 農民黨 小林立
- 自作農 小林立
- 利平の次女 小林立
- 利平の姉 小林立
- 利平の妹 小林立
- 都立の女房 小林立

バサリと落ちたかもち。

ヒヒヒと虚空の笑聲

「お岩長屋」上演餘話

金剛麗子



「幽霊の正體見たか枯尾花」の諺通り誠に馬鹿々々しい位ナンセンスなお話では御座いますが、私にしましては生れたから始めて味つた恐ろしい出来事であり、ゾツとした話なので御座います。恰度昨年の夏の事で、鳥江先生が脚色なされた「お岩長屋」が角座に初演する時のことであります。その折私の扮する役は、お岩さんには、憎悪の有りつたけで酬ひられるお花だつたのございます。

夜ごとくの稽古も積み終つて、案じ病つてゐた汗みどろの初日もどうやら無事に済ます事が出来て、ホツとした思ひで歸つたので御座います。

母と私と女中の女許りの三人暮しの家庭の空氣は至つて和やかでございました。で誰の口からともなく、其の時の狂言に因んで怪談噺に花が咲きました。「ほたん燈籠」の話、「四ツ谷怪談」の話、田舎の劇場でよく見る開かずの部屋的事等、それからそれへと話の種は富士の御山程湧き誇る金明水の如く、汲めどもく盡きませんでした。

新	ラ	ダ	客	女	ダン	詩	中	有	若	群	同	同	農	農	村	執	利	長	娘	女	小	預	同	同	預	預	
農	ラ	ダ	客	女	ダン	詩	中	有	若	群	同	同	農	農	村	執	利	長	娘	女	小	預	同	同	預	預	
産	グ	グ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ	サ
銀	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ	ビ
行	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選	選
本	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手	手
店	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉	吉
江	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
橋	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩	浩
課	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
長	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若	若
支	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田	田
店	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
所	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
面	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
會	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長
場	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長	長

殊に、昔から「四ツ谷怪談」の芝居をする時とは、必ずお岩さんの靈を祀つて、心から拜さなければ、お岩さんの祟りて怪我をしたり、種々な事故が出来たりしたものだ。と、云ひ聞かされもし、聞きもしてゐましたので床の間に「お札」を安置して祀つてあるお岩さんの靈に、再び手を合せるのでした。

夏の夜も午前二時には、道行く人の氣配もパツタリ杜絶えて、机上に置いた腕時計のセコンドを刻む音が判然と聞えてゐました。自分から云ひ出した怪談、漸に、三人の胸の中は、何時の間にか心の落ちつきを失つて、眼ばかりが矢鱈に牙えて、蟻の足音すら聞き分けられる位神経は尖つて來ました。さうなるとお互は全然と黙り勝ちになつて、部屋の間々や天井の間々、果ては押入の奥迄も視線で窺つて見るやうになるのです。神経は益々苛立つて、自分から拵へた恐怖觀念に怖えて、すつかり小さくなつてしまひました。

其の時私はもう我慢が出来なくなつたのです。餘りに失禮な事で大きな聲では云へませんが、實はおしつこがしたかつたのです。で、私は恐々乍ら思ひ切つて座を立ちました。同じ思ひだつたと見へて、母も女中も無言の中に椽側迄從いて來たので、私には用を濟まして植込みの彼方に鋭い眸を向け乍ら手を洗つてゐた時です。突如、私の頬を撫でたもの……。黒々とした毛が私の頬をサツと撫でたのです。全身の産毛は遽に逆立ちして、肌には一杯粟粒が生じました。ザーツと身體中の血は



第七場 利平の家の横手
利平の息 義男
姉嬢 おき
小 林 利
利平の息 弘平
同 次女 おろ
刑母 おろ
事 田中聖一郎

第二 時雨唄 鈴鹿越

額田六郎作・徳田純宏演出
披露 藤井亜木良
突破に生じた危難の爲めに人生の行程を左遷させられる事は極めて多い同時に悲劇の發端は何處にでも得つてゐる。偶然に出會した討つ者と一の妹——討たれる者の子息と其の老伴——期せずして一ツ所に會した四人の運命は……？ 仇討に絡る悲しい物語り……。

第一幕 第一場 勢州鈴鹿峠の頂き

浪 人 藤崎亮之進
通 行 旅 主人 福岡君俊
茶 店 の 亭主 伊東久夫
今 里 の 家 來 源 次兵衛 大澤井光
今 里 の 母 松 半 昇乃平 大澤井光
駕 那 母 松 半 昇乃平 大澤井光
玉 屋 の 女 中 糸川浦
第二幕 第一場 關の宿山形屋の離座敷
藤 崎 亮之進 同宿はづれの往還 山形君俊
今 里 の 老 母 松 半 平 乃 大澤井光
今 里 の 次 兵 衛 乃 平 大澤井光
通 源 次 兵 衛 乃 平 大澤井光

すさまじい勢で足許へ下つて行くやうに感じました。直感的に閃いたのは「お岩さん」祟りと云ふ言葉です。瞬間、恐怖の絶頂にあつた私の手は、パツと無意識に拂つたのですが、次の瞬間にはバサリツと頭の上に被つて私の顔はその怪し気な毛で埋められてしまいました。

勿論、キヤーツと云ふ叫び聲と共に平駄張り込んでしまつた事は云ふ迄もありませぬ。母も女中も、私の叫び聲に、同じ様な悲鳴を擧げて三人一塊にしがみついてしまひました。半ば意識を失つた私の耳へは「イヒヒヒ、ヒ、ヒ」と云ふ富士野さんの扮せられたお岩さんの氣味の悪い、凄ひ笑ひ聲が耳をつらぬいて躍り込んで來るのです。繪で見たお岩さんの顔、晝間舞臺で見たお岩さんの怨めしさうな顔が、大きく、小さく、眼の前に散らつて、それこそ本當に生きた氣持ちは有りませんでした。其の時の私の顔は恐らく、鬼氣に打たれた死人の顔も斯くやと思ふばかりだつたらうと思ひます。

やがて、幾分か心に落ちつきの出來た母は、私の頭から顔、肩先にダラリと下つた毛を注視することが出來たと見へまして「これ、根かもじぢやないの？」と云ふ聲が聞へました。其の聲に、今迄の恐怖は漸く飛退いて、ヂツとそれに眼をつけるだけの餘裕が心に出來て參りました。成る程、束髮に結ぶ時に使ふかもじ毛だつたので御座います。「あツ濟みません。それ、私のかもじだつたのです。餘り汚れてゐたものですから、今日洗つて此處へ干しておいたまゝ忘れてゐたんです。本當に濟みません」と泣き出したやうな顔をして詫びる女中のしほれた姿を見ては、吐く元氣もなく、三年位壽命の縮まつた思ひで、苦笑してしまつたので御座います。「ゾツとした話」と云ふ御注文に對し、聊か程度を通り越してしまつた形でございますが、何卒お恕し下さいませ。

第三 豪俠 淡

熊

八景

瀨川春郎作並二演出 披露 藤井詔木良
明治三十五年、當時大阪には第五回内國博覽會が、開催され、その會場の問題で、西南兩國の有志は、天王寺か市岡かと競を削つた。今は不夜の歡樂境新世界も當時は不毛の郊外地で、天王寺の森と共に狐狸の出没する程の處だつた。遂にこの土地に華々しく博覽會を開がしたたのは喧嘩嫌ひの豪傑淡熊の人情と活躍によるのでした。意氣地と面目に生きた浪花の豪傑 淡熊の事蹟を描く……

第一 幸橋淡熊の家の前
第二 夜魂神社境内
第三 淡熊の家

旅 淡熊の子分 清 鶴吉 市中
淡熊の子分 桃 吉政 田中正章
淡熊の子分 沖 吉政 田中正章
同 豐 菊 三吉 田中正章
同 同 菊 三吉 田中正章
同 同 菊 三吉 田中正章
同 同 菊 三吉 田中正章

宮 小政の女房 湯 松 賣 富 芝 天 中 六 田 吉 中
同 津 湯 松 賣 富 芝 天 中 六 田 吉 中
神 樂 湯 松 賣 富 芝 天 中 六 田 吉 中
淡熊の子分 鳥 藏 吉 政 三 松 賣 富 芝 天 中 六 田 吉 中
同 同 鳥 藏 吉 政 三 松 賣 富 芝 天 中 六 田 吉 中

同 淡熊の事 銅 傳 佐 兵 衛 久 為 松 三
同 淡熊の子分 南 久 為 松 三
淡熊の子分 喜 三
淡熊の父 互 喜 三
淡熊の女房 喜 三
淡熊の娘 喜 三

お常の良人 松村勇之進 常
篠原の 松村勇之進 常
長槌の 松村勇之進 常
上の原の 茅野金三

小伊波中豐高原河松富生芝天中六田吉中
波東居田松歌浦孝子郎 篠原の 茅野金三 上の原の 茅野金三
郎 孝子郎 篠原の 茅野金三 上の原の 茅野金三

亂れ髪に……………

長襦袢一枚

井戸側に佇んだ怪美人

藤本正雄



今から十年程前新聲劇が辨天座で一ヶ月の興行に三十の大入袋を出し威張つてゐた時分でした、私は椎寺町の貝鉦プロイカで中村と云ふ家の二階を借りてゐました。其家の主人は三十五六の口髭の有る好男子でした。嫁さんもやせてはゐるが仲居上りのあか抜のたすつきりした女でした、私は其當時高等ルンペンのような生活をしてゐましたので歸つたり歸らなかつたり、芝居打出し後の氣分で氣持の走るまゝに行動を取つて至つて不規則な生活をしてゐたのです、今晩も打出し後の二の替りの立稽古が一時頃濟んだので何處かへ出かけ様と思つたが何うした事か足が家に向なかつたので、其まゝふらふらと家に歸りました、下の夫婦は二時前と言ふのに何うしたのか未だ寝もしないで膳を中に差向で一本飲んでゐました、只今と挨拶すると嫁さんはお銚子を手にしたまま振向もせずお歸りツと吐出す様に言ひました、別に私は夫んな事は氣にもせず床の中で後二日で初日の臺詞の暗誦をしてゐました。すると下から嫁さんの大きな聲が二言三言聞へました。一寸間有つて今度は嫁さんの泣聲が聞へましたが、私は又ヒスの

茅赤浪三同木大小淺南淡	木貧娘浪淡請小天菊淡南群土土淺	浪子
野花のの	花熊女房花の顏	花の子分
田初又	お初太	初太
金太五	い	徳郎分
三龜郎郎福ま市郎政助久熊覽猿橋附近	市娘常花郎役政徳三熊久衆藏工助	徳郎分
小鳥辻芝福金山伊原藤波中會	山糸小和辻大原吉芝中波大河數藤家	吉辻大
波居野田岡剛口川健本多田	口川松歌野健田田多村本	田野ぜ
若良君麗俊八正正	俊浦孝良正正安正	正良
朗正一新子子雄郎作雄穰造	雄路子一い作雄新造穰い夫名雄	雄一い

嫁さんが何か言つてるなアと思ひながら、臺詞書を胸にのせたまゝ、深い眠りに這入りました……藤本さんくんと私を起すので目をさまして見ると、寢巻姿の下の主人が藤本さん大變です一寸来て下さいとをどくしながらあわて、降りました、私も放つてはおけず何事かと思ひながら主人について降りました。主人は、だしのまゝ、庭に飛降りて通り庭の臺所の側の井戸端で立止つて藤本さんコレコレと言つて指差すので其處を見ると最も薄暗いのでよく見ますと嫁さんが鬘髪に長襦袢一枚で井戸端にへたばつて釣瓶を握まんとして延上つてゐましたが力なく又へたばりました私は何心なく奥さん何うしたのですと肩に手を當てたら出抜に私の右の手首を両手でグイと握り締め振りつて下から私を見上げました其時嫁さんの顔を見た私は何共言ひ様のない氣がしましたつまりぞつとしたのです、其嫁さん鬘髪の嫁さんが見上げた目は白眼ばかりで鼻と口からは血が出て顔色は紫色でした。アツと思つて手を振放さうとしましたが仲々取れません。女の一念とでも言ひますのか嫁さんは私の手首を亭主の手首と間違へたのか金剛力で握つて放しません、そして形相の凄じい嫁さんは口から湯氣の様な呼吸を吐きながらミ、ミツツと言ひました、私は主人はと振り返つて見ますと其處にゐる筈の主人は居ないのです、私に張番さしてはだしのまゝ、醫者に走つたらしいのです、其間薄暗い井戸端で手首を両手で握まれてゐる私は嫁さんの一舉手一動作の總てにぞつとさせられました。嫁さんはヒスの結果商賣用の鉞をさらす劇薬でカサンカソーダを多量に飲んで胸が焼けるので苦しみの餘り水を欲しさに井戸端に這出たとの事でした。夫は主人から



天 吉田正雄

中村扇雀 合同劇 京都座

晝夜二回開演

第一 月山おろし 南戸源彦作・中井泰孝脚本・松田次郎監修

酒 田重右衛門 市川九團次
 女 山おの銀次 市川健太郎
 女 田房お角 市川錦吾
 女 中おの角 市川本録
 女 右衛門お若し 市川光江
 新重右衛門の若い者 市川小段

第二 輝虎と樵夫 野淵龍樹監修 松田次郎監修

山長 市川段四郎
 本山 市川健太郎
 宇和 尾上松太郎
 女長 尾上三郎
 女 田房おの銀次 市川錦吾
 女 田房おの角 市川本録
 女 中おの角 市川光江
 女 右衛門お若し 市川小段

第三 色彩間苺豆 大阪新町座

百姓與右衛門 市川小太夫
 女房かさね實は奥女中 市川扇雀
 大阪新町座 清元連中

後で聞いたのですが、……物凄い程の美人を見てもぞつとします物凄い程の天刑病者を見てもぞつとします。戦争時分に最もキザな形好をした男女を見てもぞつとしますぞつとした事は澤山有りますが未だに私の頭から放れませんのは其時のぞつとした事でした。

たつた一ツ！

ぞつとする行末



芝田新

「ぞつとした話」なんて、あんまり小生にピッタリ来ない。ゾツトの方で小生を見たら、失禮しちゃうだらう。で、折角編輯子の注文がお答への出来ないのが、残念である、ま、今の所小生の行末を考へたらば……

ぞつとする次第である。

×

×

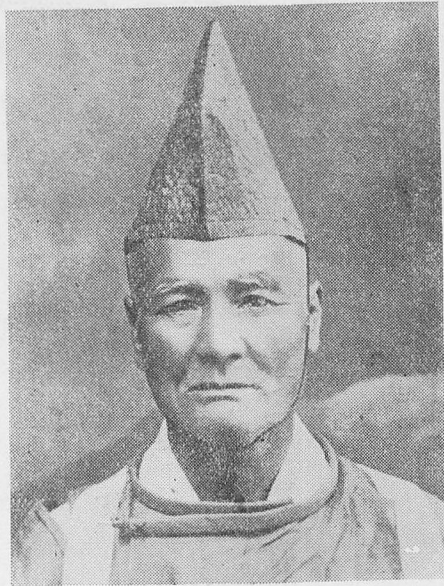
×

大森痴筆改修

第四 鐘も恨鮫鞘 二幕五場

第一幕(上) 住吉の濱、茶店

古丹若女按亭飛廻井小丹奴棍隠若矢香
 手波且郎摩主脚男筒屋女波屋角清岡徒鳥具
 屋屋那助若播物大藤小女屋角清岡徒鳥具
 八お三三兵田太おきい文兵兵兵
 郎兵つ三兵田太おきい文兵兵兵
 衛ま郎野市衛屋七吉くち助藏入助衛衛
 香二、同法善寺裏道
 輸入れ徒才半彌彌兵衛次助衛助藏入野郎
 若島才兵兵兵
 矢島才兵兵
 市市嵐市尾石木菊松中中
 川川川村上山下健録本村村
 小九右段松二二美錦成太
 太團鏗太太二二美錦成太
 夫次門猿郎郎郎子吾郎雀



浪花の豪俠

小説 淡熊一代

薰甫庵

漆黒に塗り潰された安治川沖の暗は、風の叫びと海潮の怒號に不安な焦燥と何か大事な秘密を包むかの如くに感じられた。

ヒイ／＼と鳴る悲し氣な風の甕笛に誘はれてか暗の底からぼつかりと浮上つた灯が一つフワリと高く揺れると見れば又高く光つてスーッと降る吸はれ、と見れば又高く光つてスーッと降る風は怒り、海潮は吠える其の中に灯は上下しつゝ不規則に點滅しながら岸を目がけて走り

寄る。船だつ、「やつしつし」と櫂聲に全生命を投げ込んで、風と争ひ、波と闘ふ船頭は向ふ鉢巻の素裸で、波浪の山を駆け、或は千尋の谷の逆落しも物かは真しぐらに衝き入れた安治川口、ぼつとした途端に船はドンと右舷を杭に打ちつけて、ジャジャ——と葭の洲寄りに乗り入れた。

「もふ宜からう御苦勞であつた少し休め。客の武士は優しく船頭をねぎらつた。

「波の高いのを承知で無理に船を出させ飛んだ夢目に遭はしたが、ま赦せ、之れも御國の爲めぢやから暗。」

武士は汗を拭ふ船頭の側に立つて四邊を見た。東雲の空にクツキリと浮き出した生駒の山、其の裾を包む暗の中から炎々たる焔があがつた、「オウ火事ぢやあの火は……」

二人の武士は顔を見合せた。「呀ッ從天守だ、大阪城は慶應四年正月將

軍上洛の問題から鳥羽伏見の戦ひと成つたが、幕軍に利無く遂に將軍は開揚丸に乗じて江戸に歸つた、此の時京都に在つた山内容堂は將軍隨東の不利を思ひ、薩長の軍が鳥羽伏見に集結せられて居る間際に乗じ、大和路から短身上洛し、禁闕に謁してお詫び申上よと重臣二人を密使として送つたのであつた、けれど大阪城に着いた時には將軍既に開揚丸に移乗の跡で二人の使者は海上に將軍を訪ね、ば成らなかつた。土佐屋敷のお船御用は立賣堀の淡長である主人長二郎は御用を拜して熊ンチヨの船を出した熊ンチヨ！それに腕に掛けては淡路屋が自慢とする淡路屋の熊二郎、後の淡熊其の人であつた。彼は二人の密使を乗せて安治川沖に開揚丸を尋ねたが既に軍艦は抜錐の後で、船は徒らに風波の飄弄をうけたのみで空しく漕ぎ歸らねばならなかつた。其の黎明、大阪城は幕府勢自らの手に焼かれたのだ其の後維新の事業はスル／＼と進み、五ヶ條の御誓文は國民の前に發せられる、戊申の詔勅は降る其の事を耳にする都度熊ンチヨは考へた「お國の爲に？？」安治川を上る船の中で、土佐の密使に聞かされた尊王の心

それは熊ンチヨの心に深き感銘をあたえずには置かれなかつた。「俺もお國の爲めに……と思ふ毎に彼の血は燃え上つた。」
「熊や、どないした……又お店を休んだな、それ程博突が好きならいつそ内へ來て博突打に成つたらえうが。」
飯やの親方が通つた頤爲はいつも感嘆事を云つて居ただが熊ンチヨは只ニヤリとする丈で應えやうとさえしなかつた。けれど彼は暇さえあれば此の飯やえ來てはごろ／＼としてゐた無口な彼は黙つて負た、稀にも勝つた例は無く、何時でも／＼負續けたけれど別にしよげるやうな事は無かつた。
熊、お前いつも負るやうだがそれで居て面白いか
「ウム面白い……。」
「どうや偶には勝てよ、お前かて負度い事は無からうが。」
「樂んでるんだ、負たつて勝つたつて大した變りではあらへんツ！事も無げに云つてパイと出て行く後影を見送つて、頤爲は考へた。あの位不思議な男は無いと、酒も吞まず、煙草も吸はず、と云つて女道樂をするでも無い熊

ンチヨは、いつも暗闇から牛を引ずり出したやうで、それて居て人なつこい、熊ンチヨが來ない日は何となく飯やの内がさびれたやうに淋しくさえ思はれる妙に惹き附ける力のある思ひだと考へた。然う考へたのは親分一人では無い、子分の誰も彼もである。分けても娘のお花は父にも増してだん／＼と引ずられて行くのだつた。
「どうや、熊とお花はもふ出來たか……？」
頤爲は熊が娘と戀仲にてもなれば宜いがと思ひ出した。
熊ンチヨ、俺の内へも遊びに來てんか。
頤爲とは兄弟の土清も誘えば新屋敷の早竹も内心熊ンチヨに眼をつけて身内にしよぶと考へて居た。それを知るか知らないか頤爲は無暗に慌て出して密かにお花と熊ンチヨが出來合ふやうな機會を自ら作らうとさへしたのだつた。然し熊ンチヨは決してお花に關心を持つやうな態度を見せなかつた。
「あの野郎馬鹿なのかずるいのか……」と飯やの親分は焦々とした。
「熊、ワレはお花嫌いか？」
「そんな事アおまへんぜ。」

「どうだ夫婦になるか。」

「さうさなア……」

と口先では考えるやうだが、其の場になるといつもブイと出て行つて仕舞ふのだ。

「オイ熊、飯やの養子にしたらうか。」と高飛車に出ると、「フン、ま、置いてくは」

と事も無げに言ひ捨て、出て行くのだ。

娘のお花は九郎右衛門町の松本席から小市の名で出て居た太藝妓だつたが、種々の事情で此の當時親元へ歸つて居たのだ。

「多寡が濱通りの船頭風情……」

と一流で賣つた名妓の眼には濱臭く、熊ンチヨは寧ろ惨めな存在にしか過ぎなかつたであらう。其の熊ンチヨの魅力にお花はかへつて次第／＼に惹かれて行つた。

「熊さん、どうしなはんの……？」

と、膝すり寄せて眞面目に問ふ。薄暗い飯やの二階で晝寝する熊ンチヨを揺り起して決心を促すお花の姿は日頃に増して美しくもなまめいて見得るのだつた。

「お前の氣持は有難いがな、ワイは小糠三合にヤア成り度う無いのヤ」

話は何時も糊と水で少しも熱は上らない。

願爲は業を養やした。

「熊、ワレはお花と乳くつたなき、返事に依つたら首を貫ふぞ。」

と上へ丈けても險悪に出る外に道は無かつた。けれど熊ンチヨはニヤ／＼笑つて「阿呆らしい、何を云やははる」と些とも合手に成らなかつた。願爲も根に任せ暖簾と腕押しの間答を進めて行つた。

「お花、意久地なし、ワレは親の眼の前で美事に広鐵砲を喰ひおつて、それで面目が立つと思ふか、出て行け、もふワイの娘ぢやア無いぞよ、勘當した。」

と云ひ切つた、其の強い言葉に向もお花は賈す氣に、

「え、男には恥をかゝされ、親に勘當されたからには、もう大阪にも居るやら居らぬやら、ではもう此の世では再びお眼にはかゝれませんまい……しよんぼりとして出て行く姿を、黙然と眺めて居た熊ンチヨは何思つたか

ブイと立つて出て行つたそして一時の後お花と共に飯やの茶の間に現はれて「扱て親爺さん、勘當受けたお花さんを、今から女房にしようと思ふが、元より一度縁の切れた人だか

ら、おまえに苦情はおまへんやらうな……」と改つて念を押した。

願爲は合手の顔をしげ／＼と見て居たが「苦情は云はん、然し何ぼ勘當したかて眞の親子ぢや、何ぞ呉れてやる

「イヤ、それだけは眞平や

「まア黙つとれ、乞食するにも茲は居るワイ親が子に呉れたるものを他人のお前がとや角云ふ事アあらへん、サ、お花、お前にやるのは是ぢや」

と云ふなり投げ出した骨子二ツ、維新變革の裏舞臺で、土佐屋敷の武士を乗せ、淀の川瀬を機織る如に往來した淡長の若者熊ンチヨは此の時から願爲の盆胡座を受けたのだ

「困るがな、ワイは家もあらへんのだ」と肩を寄せたが道理、女房と共に引取らねば成らぬおも立つた子分がざつと二十八人、差しあたり幸小橋の片ほとりに小じんまりとした新世帯、淡熊の札を打つて盆胡座を敷せたのが明治六年の秋だつたとか、願爲は以來飯やの部屋を閉じて坂町へ隠居した彼は當時の大俠客早竹、南部、米清等々に敬意を拂つた程の人で、其の直系からも有

名な親分江戸金を出した程の大親分であつた
丈けに盆胡座をうけついで淡熊は部屋々々の
話題に成らずには濟まなかつた「其座奴だら
う…？、之れが定り文句だ名も知らぬ川船の
船頭！それが飯やの跡つぎとは己れを知らぬ
野郎だと反感を持つものも多かつた、然し淡
熊はそんな事には無頓着だつた。

「お前かえ…？飯やの若親分とか吐すのは、
と喧嘩を賣る奴もあつた。

「若親分なんて名前はないぞ、頭爲は頭爲、
淡熊は淡熊ぢや、ワイは頭爲の親爺の勢力が
邪魔とこそ思え、若親分など云はれとうは
無い」

と何時も淡熊はつぶやいた。

「ヤイ、汝は一人の親を餓死にさせる了簡

頭爲は幸町の内へ怒鳴り込んだ
盆胡座を敷せた其日から淡熊は日に一兩の
養ひ料を、己れは喰はずに過ぎやうとも死ぬ
まで送り通して居た、然し他人を悪むに急で
あつた淡熊の内情はいつもヒク、火の車の
繰廻しもつき兼ねるので、偶には滞る事も
あつた、毎日の如に子分が金を一兩と、お花

さんの心やりの晩茶を持つて行く筈なのに、
それが二日三日滞ると「コラツ干し殺すのか」
と怒鳴り込むのだ、金に不自由は無い、頭爲
が斯度風であつたのは深い意味があつたので
ある。

博奕打とは云え、淡熊程博奕の下手な者は
無かつた恐らく一生を通じて貢て居たと云つ
ても差支ないであらう、けれど好きなと云へ
ば見て居る丈けでもよかつたらしい、心齋橋
邊のある處で催された或日の會で彼は有つり
だけ張り込んで了ひ、ぼんやりと眺めて居た
隣席に居たのが阿波の市川、此の人は阿波一
國の大俠客で子分身内は直系丈けで一萬人と
云ふから逆も大きなものである、其の人が小
さな聲で「オイ淡熊の…百兩許り廻して…

…」と囁いた、淡熊は困つた、己れの懐は
眞盡きて居る、我が家にだつて金は切れて居
るに違ひ無い、
きれいきつぱり取られて了ふた、ドリヤ、
もう去ぬワ

「オイ淡熊は居るか、サ、阿波の市川が首を

其の夜、市川は幸町に乘込んだ、
「オイ淡熊は居るか、サ、阿波の市川が首を

貰ひにやつて来たぞ、留守を守る女房のお花
はびくともしない
「何の爲めに内の親分の首を取ると云ひなき
る
あべこべに詰寄つた
「汝等の知つた事ぢやねえ、淡熊を出せ、出
さねえか
「留守やから歸るまで待つて居いお花は恰で
小僧にでも命令するやうに云つて火鉢端で糞
の煙を輪に吹いて、其處へ頭爲が來合せて
妙に白けた容子を見て取り
「お花此の人は何處の人や？
「何處の人か知らんけど、何でも親分の首が
欲しとか云ふてまんのや。
「フーム、偉い奴ぢやな、オイ、汝れ何處の
誰や
「俺は阿波一の顔役だ、市川を知らねえか
險悪な眼でキツと睨むだ、然し頭爲は鼻の
先でせよら笑ひ、
「お前阿波の顔役なら、お弓か十郎兵衛より
あらへんぜ、市川なんて聞いた事も無いワ…
…
と云ひながら彼の前に小腰をかゝめて

「やい、汝れの如な田舎者が今演出しの淡熊の首を望むのは、筆を持つてお星様を叩き落さうとするやうなもんや、汝れなんかア此の親爺の尻でもしやぶつて置いたらいいのや」と云ふが早いか市川の顔の前にくるりと尻を捲くと共に「ブーツ」と縫籠を一發！

「阿呆の顔役が聞いて呆れる。」と云ひ捨て「ムスタ」と出て行つた、流石の市川も呆氣に取られて斬りつける勇氣さえ起らなかつた、其のあとへ淡熊は歸つた、其の時の應答に、

「訪ねて呉れたり嬉しいが、首を取るとは些と困つた、市川さん、駒を廻せと云はれても無い駒はどうしよふもない、それをあの場へ打ち明けたら、ワイは兎に角お前の顔が無からうが、キレイに取られたと云ひ乍ら立ち上つたはお前への返事やつた、腹が立つたら堪忍しいな、そんな事で首の切ると、シヨモ無い、ハツハツは……、お花、何にしてんのや、茶など入れぬか、さ市川さん、まあ樂においで……」

露程もこだはらぬ淡熊の態度に、市川は感じて手を衝いた、

「親分！、救して呉れ、成程俺は阿波一國の顔役など自れから云ふ程の器量なんか無い男だ、濟まなかつた俺は争途の上へ尻を掛けられたのは始めてだ、其の頭爲を親にするお前さんの器量と云ひ、おかみさんの度胸と云ひ、恐れ入りました淡熊の、俺に益を呉れませんか、淡熊の魅力は不思議にも會ふ人の悉くを畏伏させずには置かなかつたそして淡熊の人氣は漸く南大阪に擴がつて行つた。

頭爲が常に今宮邊を見廻つて、飯を喰はぬ者などを見掛けると、内へ來て飯をたべな……と何人でも連れ歸つた、其の習慣は淡熊が曾て土佐の武家方から吹き込まれた、國の爲め世の爲めに！と云ふ言葉の意味とも結びついて、彼の胸奥に湧く同情心と共に愈々それが自分の役とさえ思ひ込んで、今宮から長町裏、釜ヶ崎天王寺、大黒から西濱へかけ哀れな家を見舞つては悪み、さばきの付かぬ者は助け、そして博奕打仲間でも、間違ひから其の筋へ引張られた者でもあれば、誰れ彼の身内を問はず、留守宅を見廻つては糊口の憂ひをのぞいてやつた事などは、殆ど數へ切れ

ぬ程であつた、殊に昔忘れぬ淡熊は濱通りの若者は誰も彼も可愛がり、又總ての者が淡熊を敬慕して居た。

それは明治十八年淀川の堤防が切れて大阪全市は空前の大洪水を現出した、其の時淡熊一家が古董で活動した事は勿論であるが、救えと云ふ淡熊の聲一つで、濱通りの若者が一聲に起ち船を出して溺れんとする人々を救つたのも彼が十年一日の如く下を愛した賜ものであつた。

淡熊は一人の敵も無く、其の徳望に依つて次第に顔を擡げて行つた、難波の福の如きまて、淡熊には手厚くした、それ丈彼は更に顔を上げて行つた幡隨院の長兵衛には旗本と云ふ敵があり、次郎長は黒駒を相手として荒神山に鎧をけづる、此の種侠客親分達は、昔から明治大正に掛け、随分心も荒かつたので往々警察や裁判所の厄介になるものも有つたが、淡熊は一生を通じて其の筋の爲にこそなれ世話に成つた事は無かつた、それは彼が平素から「お國の爲め……」と云ふ事のみ心懸けて居た結果だ。明治三十三年第五回博覽會が大阪の南端天王寺に開設されんとした頃は

未だ大阪には俠客がウヨクするほどゐた無
論俠客とは名だけで實は賭博のみで渡世する
者、或は故意に喧嘩をしかけて酒食の資を得
んとする者、中には名のない無頼漢の群が一
團となり跳梁跋扈するなぞ、大阪の町はそれ
等の出沒に災されて血を見ぬ日とはなく
南大阪は無警察の状態であつた殊に博覽會の
建設された箇所、今の新世界から茶臼山に
かけての一帶は人柄が極めて悪く、西側には
俗稱蜂の巢と云つて隈盲や、隈感などが群居
し、最も質の良い方で不駄直しと云ふやうな
やくざ者のすんで居る部落があり、南側はガ
ードと稱へて中着切や無頼漢の巢窟であつた
からは等のやくざ者や無頼漢が工事場に来て
邪魔をするので仕事の捗らない所へ持つて來
て工事關係の親分達の間に揉め事が起つた、
め、工事は一向進捗せぬのみでなく、毎日大
喧嘩が始まると云ふ状態だつたので、工事請
負者たる大林組も之には困り抜いたものであ
るしかもその喧嘩と云ふものが官憲の手では
逆も鎮壓出来ない程に險惡なものであつた。
「こりやあかん恠んな事して居ては國家の爲
めに大損害や」

淡熊は斯く叫ぶと腰巾着、今の言葉で言へ
ば祝書官役の南久や鳥吉を連れて、幸町か
ら二人曳きの人力車を草駄天の如くに天王寺
へと駈けさせると、行く途々には鬼をも挫が
うといふ風強な若者達が長い物や七首を呑ん
で示威運動を試みてゐたが淡熊の顔を一目見
るや目ひき袖引きして「コソ」と何處かへ姿
を隠すのである。
車夫が漣のやうな汗を流して天王寺の建築
場に着くと、案の定大勢の請負師や土方が彼
方此方に一團になり、寄らば斬るぞの身構へ
で何かと密談を交しその雲行は一瞥したゞけ
でも險惡な事が窺はれた。
淡熊は一同をグルリと眺め
「皆の衆、お互に腹も立たう、感情の纏れも
あらう、けれども、こんどの仕事は一個人の
仕事でなく、手つとり早く言へば國家の仕事
だその重大なる仕事を、私事の爲めに徒ら
に延引させるといふことは、これ取りも直さ
ず國家の爲めぢやないか、國家の爲めにならん
事すれば天皇陛下に不忠を臻す事になる、
吾々俠客といふものは、時と場合によつては
亂暴をすることにならうけれども、天皇陛下

に不忠な眞似は一度だつてした事はない、そ
れは皆の衆は先刻御存知であらう吾々俠客が
不忠になる行爲を毎日繰返してゐては、吾々
俠客の先輩にどうして顔が向けられやうか。
どうかこの邊の事をよく考へて、一つ私に任
しては下さらぬか……」
淡熊の噂々と説く言葉の中には、一つとし
て道理に外れた言葉はなかつた。此の臆動を
引起した連中の中に浪花組と云ふのがあつた
浪花組は以前三谷の幸太と云つた浪花初
上初太郎である、浪花は關東から大阪に戻り
忽ち眼をつけたのは淡熊であつた「此の勢力
を引かつて……と伶俐な彼は忽ち淡熊の身
内に成り、此の博覽會をキツカケに淡熊を土
木業者の仲間入りをさせよふと思ふて居た、
けれど淡熊は「知らぬ事に手を出して味噌を
つけたらつまらん」と却々承知しなかつそ、
其の内偶然にも此の事件が持上つたのだ。
不可ません、幾等淡熊の親分でも……
條理をつくした淡熊の言葉を一番に兼ねつ
けたのは自分になる浪花である、濃厚な淡熊
も此の時許りは烈火の如く憤つた。
「已れッ、他人に先んじて俺に恥をかせる

かと初太郎を引倒して散々に撲つた、取り巻いて居た親分達は留めない譯には行かない、仲裁をして、そして白紙一任と云ふ事になつた、浪花は機先を制したのと、斯くして親分に工事全體を預らせる爲め一と芝居打つたのだと……

それは天王寺博覽會の事件が済んで間もない頃、甲府鐵道敷設工事中、その工事に關係してゐた二人の大親分が鎗を削つて對陣したことであつた早野金三といへば關東に名を知られた大親分、その對手の三谷又五郎といへばこれまた著名な大親分であるが、この二親分がこの下請負が因で初狩の川を挟んで雙方孰れも抜刀の決死隊を以て自兵戦をやるので、その地方の人は商賣も出来ぬのみか、官憲に於いてもどうしても手がつけられない。毎日の新聞を見ると、毎日數人數十人の殺傷者が生じこのまゝ捨て置けし事が出来なかつた、尙大變な事には、全國の俠客は雙方の孰れかに加擔する爲めに、兇器を携帶した子供を多數に引き具し續々と現場へ繰込むと云ふ騒ぎだ。その對陣振を見ると、芝居で見る國定忠治

が、赤城山で戦つたのと同じやうであつたの事であるが、そこで仲解の役に立つたのは淡熊と雄波の福、伏見の勇山の三大親分だ、殊に淡熊をして立しめた原因の一つは浪花初がその昔、又五郎の盃を受けて居り、別れる時の言葉にも電報一つで飛んで行くも男同士の約束があつたので、此の喧嘩の當初から甲州へ乗出し、三谷の參謀で働いて居たのだ、三谷と浪花と赤田龜など、八人の決死隊は猿橋の山水樓で大散財をして居ると見せかけて、其の質酌婦の一人を案内に立て、間道傳いに早野方の溜場へ斬り込んだのだ、此の一事で更に喧嘩は險惡を増したのだ、けれど幸ひにして早野金三、三谷又五郎の兩大親分は、流石に大親分だけに、淡熊氏等の顔を立て、さしもの大きな喧嘩も事なきを得たがこれも淡熊の人望の然らしむるところであつた。

この時の仲裁した場所は靜岡の浮月樓、この家は徳川家康の本營に當てられたといふ由緒のある家であつて、淡熊はこゝへ雙方の親分の配下に加はつた十三ヶ國の親分達數十名を招き芽出度く手打式を終り、大阪の俠客

の名を高からしめた。淡熊が仲裁した喧嘩の数は大小合せたら殆どどれ程か數へ切れまい、淡熊は口論一つせず自分の顔色を見て自分の望みを察してやり自分の物を入質してでも自分の爲めに世話をしやるので、自分は増す一方であり、一旦子分になれば身命は鴻毛よりも輕しとして親分の爲めに盡くしたその人格を見込んで大林組は北野の木屋市を通じて淡熊を大林組の監督とした。木屋市と淡熊が兄弟に成つたのは此の時かと聞いて居る。

その後の事大林組が、大阪砲兵工廠を建築しやうとした際、東京の大親分有馬組の配下數百人が來阪して「この建築は俺の方でやるんだ」と力み返つたからさあ納まらない。それからといふものは雙方の配下が毎日のやうに拔身で亂入しあふから毎日のやうに一人か二人殺害されるそれが一年牛も續いたが誰一人として仲裁する者が出ないそこで東京からは家根屋の彌吉の身中の者も來る大阪の親分連が大坂方へ參加するなどの爲めに喧嘩は益々大きくなるばかりである。「親分なんとかしておきなさいな」と淡熊に

仲裁方を持込んで来たのは大阪でも有名なある親分があつた。

「宜しいそれじややりませう」と輕々と快よく引き受けた氏は自分の南久、鳥吉外二三を連れて雙方の親分に會ふとこれまた直ぐに解決し、それからは雙方の配下は仲よく働くやうになり、砲兵工廠を始め、續いて濱寺の露兵の俘虜收容所、大阪城南側の俘虜收容所の工事を驟く間にこしらへて了ひ、彌吉の配下が歸京するに際しては淡熊と染たる、印刷纏を着せて歸したがそれには關東方面の人達も「俺も大阪に住みたい、大阪に住めばこんな情深い親分の配下として暮せるから……」と述懐して名残を惜しんで歸京の途についたのであつた。

大新電車の生駒隧道開鑿中、工事中の人工が日下村の池で面白半分鯉を捕獲した、それが四回五回になると村人も辛棒が出来なくなり、遂には鋤や鍬で威嚇すると、人夫はダイナマイトを投げつけてこれに應戦する。

それが抑も喧嘩の始まりで、遂にはダイナマイトで家を破壊し始めたから村人は承知がならぬと敦固き始め、遂には雙方入り亂れ

て闘ひ、多数の重傷者を出した、そこで大阪奈良の兩警察は非常召集をして現場を警戒し憲兵隊まで出動を見たが、なにせ上向ふ見ずの者が何時どこからダイナマイトを投げつけるか知れないので近よれない。

そののみではなかつた、犯人を捕へやうとしてもみな抗道のやうな中に藻繰こんで了ふのでウツカリ手をつけやうものならば生命仕事である。官憲は嚴重に現場を警戒なしてゐるが容易に手がつけられない。工事請負は大林組だ、無論淡熊は引込んで居れない早速南久鳥吉外二三の子分を引つれて現場に出張すると今迄癡猛そのものゝ如くであつた人夫も親分の顔をチラリと見るや猫の如く温順しくなり手を引いたのみか、手を下さずして親分の前へ犯人が自首して出たのであつた。

それからまた、あの生駒隧道の完成するまでには、五十人の生靈が坑道の崩壞のために生き埋めにされたその時であつた淡熊は早速それ等の犠牲者を懇に葬はせたのみか將來もある事であるとして、工事請負人なる大林組にかけあつて犠牲者の遺族に扶助料を給與したがその時など遺族は歡喜して態々親分の家

へお禮に出たとの事である。
此の生駒事件の際穴の中で連日連夜に互り交渉し續けた爲め遂には健康を害して腎臟病に罹り、一時病臥してゐた揚句、病氣回復後桃山御陵の工事に出て寢食を忘れて働いた、めに一旦回復した腎臟病が再發しこれが原因となり大正三年二月六日七十三歳の高齡を以て忽焉として逝去した。

(本文冒頭の寫眞は桃山御陵工事監督當時の淡熊)

編輯後記

中座は内部改造のため目下休演中、浪花座は六月に更生した家庭劇が新興の意氣朗かに七月にも打ち越し、角座は久々に新聲劇の歸演。

道頓堀は、極めて氣持のよい銷夏陣に入り、兩座とも非常な人氣です。

特に浪花座は先々月東西の新聞紙上を賑はし、世間の視聽をあつめた「大磯心中」の真相——鳥江鏡也氏の脚色——の劇化を呼物に、新作揃ひで、更生の意氣正に織列！

家庭劇の皆様からは世界の不況と反對にウント景氣のいゝ所で、一ヶ月十萬圓の消費法を書いて貰ふし、新聲劇の人々には夏の讀物として、「ぞつとした話」を頂きました。

何れも興味と涼味横溢したもので特に御一讀をおすゝめいたします。

呼物として、歌舞伎夏狂言を小説風のものとして

高谷氏から頂きました。これに角座で目下上演中の『淡熊』の一代記を合せて鎖夏の讀物號の面目を樹立いたしました。

尙、先月十五日大阪の地で長逝した歌舞伎の新人守田勘彌丈に寄せる追悼の辭を倉田、山上の兩氏に頂きました。

また映畫界の新人阪東好太郎氏が「父に語る」の一文は父と呼び子と慈しみ得なかつた好太郎氏の苦衷にそゞろ同情の涙を覺えます。

本月は歌舞伎のない關係から餘り芝居に捉はれずに諸先生の御寄稿を願ひ、銷夏の讀物の特輯第一號として、引き続き八月も極めて自由なプランで銷夏讀物號に完璧を期したいと思つておます。

ために、本號より掲載の豫定でした瀬川春江氏の「京阪劇壇逸話集」西尾福三郎氏の「新朝顔話」及び菅原寛氏の「水に因む夏芝居」は來月號の第二銷夏號に發表する事に致しました。

誌上乍筆者及び讀者諸士の諒解を請ふ次第です。

(住田冬和)

昭和七年七月一日發行

月刊『道頓堀』第七年
第七十輯

◇ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◇ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◇ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市南區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵費五圓)

昭和七年六月三十日 印刷
昭和七年七月一日 發行

大阪市南區久左衛門町八番地

編輯者 鳥江 鏡也

印刷者 北島 竹次郎

大阪市東區船場鶴野町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

發行所 松竹興行株式會社大阪支店
道頓堀編輯部

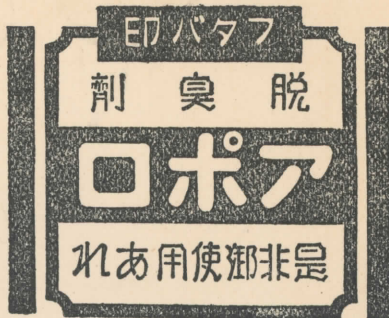
電話(一三四〇番)
六六六五番

便所の臭に困る方は今直ぐ

製創氏郎太彪林 士學藥



（瓶一定）小瓶大 金壹圓 拾五錢



△使用法

一回十滴乃至十數滴づゝ（場所により多少の加減を要す）一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

家庭必備品

使用簡潔

十滴奏効

無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かす必要がございません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒がありません。

「アポロ」ハ他の薬（カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など）と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが残らぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

到處の藥店

各百貨店に販賣す

元 賣 發
會 商 榮 光

電本話局三三五番
電話本局三三五番
大阪三番七番

大 阪 市 東 區
見 町 三 丁

松竹キネマの
トーキー陣

オール・トーキー・島津保次郎監督

嵐の中の處女

新人 水久保澄子 抜擢主演

オール・トーキー・五所平之助監督

戀愛案内

田中絹代・山内 光・上山草人 共演

オール・トーキー・井上金太郎監督

怒濤の騎士

林 長二郎 主演 第一回トーキー

松竹キネマ大阪支店